
逸脱行動が生起するプロセスと矯正方法に関する研究

課題番号15530398

平成15年度-18年度 科学研究費補助金
(基盤研究(C)) 研究成果報告書

平成19年3月

研究代表者 上市秀雄

筑波大学 大学院システム情報工学研究科 講師

目次

1 . はしがき.....	1
2 . 研究発表.....	3
3 . 研究発表の目的と概要.....	4
4 . 主な研究成果.....	1 1
4.1 生活リスク行動を規定する要因と対処行動	
- 生活習慣病，多重債務，ニートに関する大学生の意識調査 -	1 2
4.2 パーソナリティが特殊環境における対人行動の時系列変化に及ぼす影響	
- ボート競技における長期合宿に関する調査 -	2 6
4.3 情報提示とパーソナリティがタバコに対する意識に及ぼす影響.....	5 1
4.4 規範意識と情報提示が消費者行動に及ぼす影響	
- 音楽用CDの違法コピーに関する検討 -	6 3
5 . 主な学会発表論文.....	7 7
5.1 犯罪不安がリスク認知, 対処行動, 司法行政評価に及ぼす影響 :	
女子大学生の意識調査.....	7 8
5.1 生活リスク認知と対処行動ニート，多重債務，生活習慣病に関する	
大学生の意識調査.....	7 9

1. はしがき

本報告書は、平成 15 年度-18 年度科学研究費補助金基盤研究(C)「逸脱行動が生起するプロセスと矯正方法に関する研究」(課題番号 15530398)によって実施した研究のまとめです。

本研究の目的は、日常生活におけるさまざまな生活リスクの中で特に社会問題化している生活リスク(たとえば喫煙や生活習慣病などの身体に関する生活リスク, 多重債務やギャンブルなどの金銭に関する生活リスク, NEET (Not in Employment, Education or Training: 職についておらず, 学校機関にも所属しておらず, 就労に向けての具体的な働きをしていない労働可能な 15 - 34 歳までの家事手伝いを含む若者)などの人生に関する生活リスク)や不適切な行為(音楽CDの違法コピーや集団生活における行動)を取り上げ, これらの不適切な行動がどのようなプロセスで生じるのか, そしてどのようにすれば不適切な行為をしている人の意識を変えることができるのかについて明らかにすることです。

本報告書では主に,

- 1) どのようなプロセスによって不適切な行為が生じるか,
- 2) どのようにすれば不適切な行為を適切な行為へ変化させることができるか

の2点について, 調査および実験によって検討しました。

本研究を進めるにあたって, 様々な方々から数々の貴重なコメントや助言を頂きました。長年のご協力に心から感謝申し上げます。

また, 本研究に参加していただいた方々へあらためてここにお礼申し上げます。

平成 19 年 3 月

研究代表者 上市秀雄

研究組織

研究代表者

上市秀雄 筑波大学・大学院システム情報工学研究科・講師

研究分担者

楠見 孝 京都大学・大学院教育学研究科・助教授

交付決定額（配分額）

（金額単位 円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 15 年度	1,000,000	0	1,000,000
平成 16 年度	800,000	0	800,000
平成 17 年度	700,000	0	700,000
平成 18 年度	700,000	0	700,000
総計	3,200,000	0	3,200,000

2 研究発表

(1) 学会誌等

上市秀雄・楠見 孝(2004). 後悔の時間的变化と対処方法：意思決定スタイルと行動選択の関連性 心理学研究,74(6), 487-495.

上市秀雄・楠見 孝(2006). 環境ホルモンのリスク認知と回避行動,認知科学,13,32-46.

(2) 口頭発表

国際会議発表論文

Ueichi, H., & Kusumi, T. (2007, July). Structural equation modeling of risk avoidance in daily life, International Meeting of the Psychometric Society 2007.(発表予定)

国内学会発表論文

上市秀雄・楠見 孝(2007). 犯罪不安がリスク認知,対処行動,司法行政評価に及ぼす影響：女子大学生の意識調査 日本心理学会第71回大会発表論文集(発表予定)

上市秀雄・楠見 孝(2006). 生活リスク認知と対処行動シート,多重債務,生活習慣病に関する大学生の意識調査 日本心理学会第70回大会発表論文集, 945.

(3) 出版物

楠見 孝・上市秀雄(印刷中). 人は健康リスクをどのようにみているか 吉川肇子(編) 健康リスクコミュニケーションの手引き ナカニシヤ出版

楠見 孝(印刷中). リスク認知の心理学 子安増生・西村和雄(編) 経済心理学のすすめ 有斐閣

(4) その他

上市秀雄(2006). ワークショップ「犯罪不安研究の最前線 - 現代の犯罪不安の実情と問題点の再考 - 」(指定討論者)日本心理学会第70回大会(九州大学)

3 研究の目的と概要

(1) 研究目的

本研究では、逸脱行動を不法行為（例：青少年の喫煙，音楽・ソフトなどの違法コピー）だけでなく，社会問題化した生活リスク（例：NEET，多重債務，生活習慣病）など，適切な行動とはいえない行動と定義した。そしてその逸脱行動を規定する要因間の関連性を明らかにし，逸脱行動を適切な行動へ変えるための方法を，調査および実験によって検討することである。

(2) 研究背景

現在，生活リスクに関して社会問題化したリスクが存在する。身体的生活リスクであるインスリン非依存性糖尿病，肥満，高脂血症，高血圧症などが原因による生活習慣病のうち糖尿病に関しては，糖尿病の可能性を否定できない人は約 880 万人おり，5 年間で約 200 万人増えていると推計されている（平成 14 年糖尿病実態調査報告，厚生労働省）。また国民の健康に影響すると考えられる喫煙に関しては，男性の喫煙率は 2001 年の 52.0% から 2005 年の 45.8% へ徐々に徐々に減少しているが，女性の喫煙率は 14% 程度でほぼ横ばい状態である（2005 年全国たばこ喫煙者率調査，JT）。金銭に関する生活リスクである多重債務に関しては，多重債務による自己破産の件数は年々増加し，自己破産申立件数は 20 万件を超えており，10 年前の 5 倍になっている（平成 16 年度司法統計年報，最高裁判所）。人生に関する生活リスクである NEET（Not in Employment, Education or Training: 職についておらず，学校機関にも所属しておらず，就労に向けての具体的な働きをしていない労働可能な 15 - 34 歳までの家事手伝いを含む若者）に関しては，現在 NEET は約 52 万人存在する（2004 年版労働経済白書，厚生労働省）。人間関係における不適切行動に関しては，閉鎖された集団内での不適応が考えられる。集団生活においてもコミュニケーション不足やストレスにより適切な集団生活を営めなくなったり，不適応行動をおこしたり，あるいは自分の能力を発揮できなくなる場合もある。また不法行為に関しては，各個人が音楽 CD の違法コピーや，Winny，WinMX，P2P といった違法なファイルコピーが蔓延しており，音楽産業・映画産業縮小の原因の一つとして考えられている。

このように不適切な行動がどのようなプロセスによって生じるのか，そしてどのようにすればこれらの不適切な行動を適切な行動へ変えることができるかについて明らかにすること

は重要なことであると考えられる。

したがって本研究では、様々な状況における日常的な不適切行動場面の調査・実験をすることにより、不適切行動が生起するプロセスと矯正するための方法を提案し、これら不適切行動を統一的に説明するためのモデルを構築することを目標としている。

(3) 研究成果の概要

(a) 不適切行動が生起する意思決定プロセス

本研究の目的は、日常生活において遭遇する様々な生活リスク行動（多重債務，NEET，生活習慣病）に関して、これら行動を規定する要因と対処行動を統一的に説明するためのモデルを提案することである。大学生 190 人に対する調査の結果，3 つの状況に共通するプロセス：ベネフィット認知 コスト認知 態度（行動促進，行動抑制） 現在の生活リスク行動 将来の生活リスク行動，多重債務と NEET に共通するプロセス：意思決定スタイル リスク帰属 帰属 モラル・意識 リスク認知 後悔予期 現在の生活リスク行動 将来の生活リスク行動というプロセスが存在することがわかった（Figure 1 参照）。このことから，物事を決めるときには熟慮させることや，モラルや意識を高めることが生活リスク行動を適切な行動に変えるために必要であることが示唆された（4.1，発表資料1 参照）。

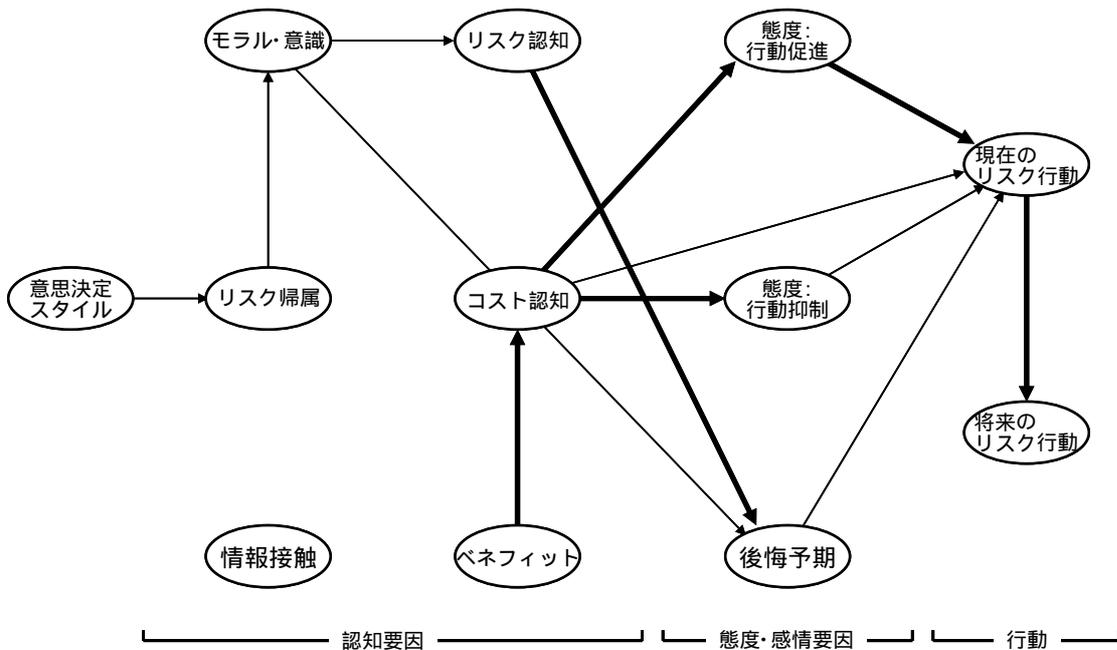


Figure 1 状況に共通する要因間の関連性

注：太線：3つの状況に共通するパス，細線：2つの状況に共通するパス

(b) 集団生活におけるコミュニケーション

長期間、他人と集団生活をする事は大きなストレスである。人は他人と長期間一緒にいるだけでストレスを感じる。本研究では、長期間閉鎖された環境における集団生活を円滑にするための要因として、パーソナリティ（Five Factor Model）、ストレス、コミュニケーション、情動、後悔、パフォーマンス、行動（ストレス対処行動、不適切な行動など）などの各要因、およびそれら要因間の全体の関連性の時系列的变化を明らかにした。方法 1ヶ月間のボート合宿を行うT大学の大学生（男15名、女2名）を対象に、質問紙調査を行った。測定は、2005年7月19日～8月12日の間においてほぼ毎日、朝トレーニングが行われた日の朝食後に行った。結果パーソナリティの外向性が高い人ほど、ストレスをあまり感じないこと、また感じたストレスに対して適切に対処できることがわかった。また、パーソナリティの調和性と誠実性が高い人ほど、時間経過とともに、ストレスや緊張覚醒+が減少することがわかった。また調和性と誠実性は、自己管理能力に影響を与えていることもわかった。本研究の結果より、パーソナリティの外向性、調和性、誠実性などが高い人は、長期間の集団生活におけるストレスにうまく対処でき、不適切な行動（他人に八つ当たりする、合宿を放棄するなど）の行動をとらないことがわかった（4.2参照）。

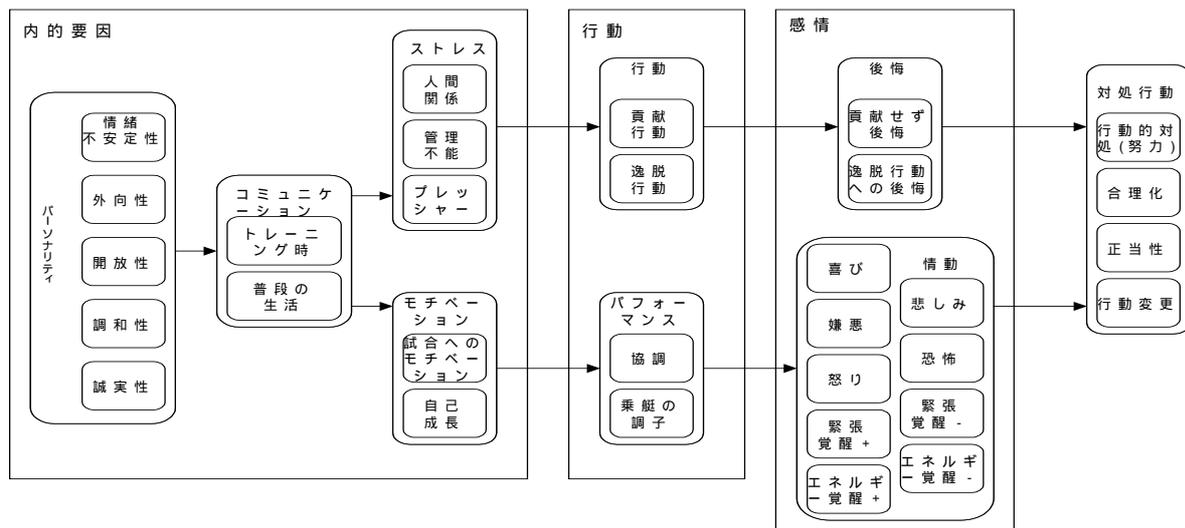


Figure 2 合宿における要因全体の関連性の概念図

(C)情報提示による態度変容

情報提示によって、不適切行動が変化するかどうかを調査・実験によって検討した。

1) タバコの情報提示(恐怖喚起 - 非喚起)と個人差(意思決定スタイル: 熟慮して決める - 直観的に決める)が、喫煙意識に及ぼす影響について検討した。調査参加者は大学生 162 名(男性 101 名: 内喫煙者 34 名, 非喫煙者 67 名, 女性 61 名: 喫煙者 4 名, 非喫煙者 57 名)であった。その結果, 恐怖を喚起する情報を提示すると, タバコに対してネガティブな考えを持つようになったり, あるいはタバコをやめようとする傾向が高いことがわかった。ただし直観的な意思決定スタイルの人は, 恐怖を喚起する情報を提示されると, タバコの害に対するリスクを低く見積もるようになることもわかった。これらの結果から, 恐怖喚起する情報は喫煙行動をやめさせるために有効であると考えられるが, 個人差を考慮した上で情報を提示しないと, 逆効果になる可能性があることも示唆された(4.3 参照)。

2) CCCD(音楽用の Copy Control CD)に関するさまざまな情報を提示することによって消費者の CCCD に対する認識あるいは違法コピーに対する認識の変化にどのような影響を及ぼすことができるのかを検討した。質問紙調査を, 大学生 133 人(男性 105 人, 女性 28 人)に対しておこなった。その結果, (a) 遵法意識の高い人に CCCD に関するポジティブな情報を提示すると, CCCD の必要性を認識させることができる, (b) 道德観の高い人に CCCD に関するポジティブな情報を提示すると, CCCD を出すレコード会社に好感を抱かせることができ, かつ CCCD の価格意識まで変化させることができる, (c) 道德観の低い人に CCCD に関するポジティブでない情報を提示すると, CCCD の購入に対して後悔をさせることになる, (d) CCCD 導入による CD の売り上げに関する情報は, ポジティブ・ネガティブに関係なくマナー意識の低い人には良い印象を与えない, ということが明らかとなった(4.4 参照)。

これらのことから, 適切な情報提示をすることが不適切な認識, 態度, および行動を変更させるために重要であることが示された。

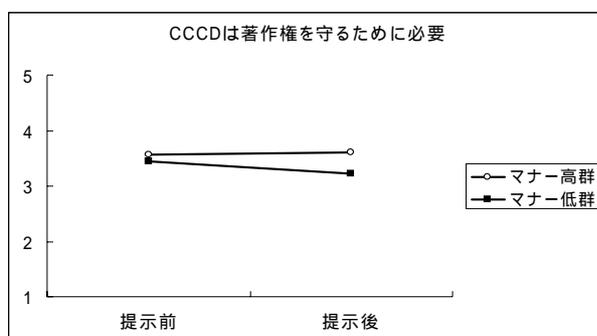


Figure 3 マナー因子, 情報提示による CCCD に対する態度の変化

(d) まとめ

以上の成果は大きく以下のようにまとめられる。

(a) 多重債務，生活習慣業，NEETのような不適切行動が生起するプロセスには，

）ベネフィット認知 コスト認知 態度 現在の生活リスク行動
↳ 将来の生活リスク行動

）意思決定スタイル リスク帰属 モラル・意識 リスク認知
↳ 後悔予期 現在の生活リスク行動 将来の生活リスク行動

の2つが存在すること(4.1 参照)。

(b) 集団生活におけるコミュニケーションでは，パーソナリティの外向性，調和性，誠実性などが高い人は，長期間の集団生活におけるストレスにうまく対処でき，不適切な行動(他人に八つ当たりする，合宿を放棄するなど)の行動をとらないこと(4.2 参照)。

(c) 不適切な態度や行動を変えるためには，

）喫煙のように身体に悪影響を及ぼす行動に関しては恐怖を喚起するような情報を提示することが有効であること(4.3 参照)

）違法コピーのような規範意識が重要である行動に関しては，正しい情報を提示したとしても，規範意識の違いによって，認識，態度，行動を適切なものに変える効果が異なる(4.4 参照)。

これらの結果より，適切な情報を提示することによって，あるいは熟慮して意思決定をさせるように促すことにより，意思決定プロセスを変化させる，すなわち，不適切な認識，態度および行動などを適切なものに変化させることが可能になるものと考えられる(Figure 4)。

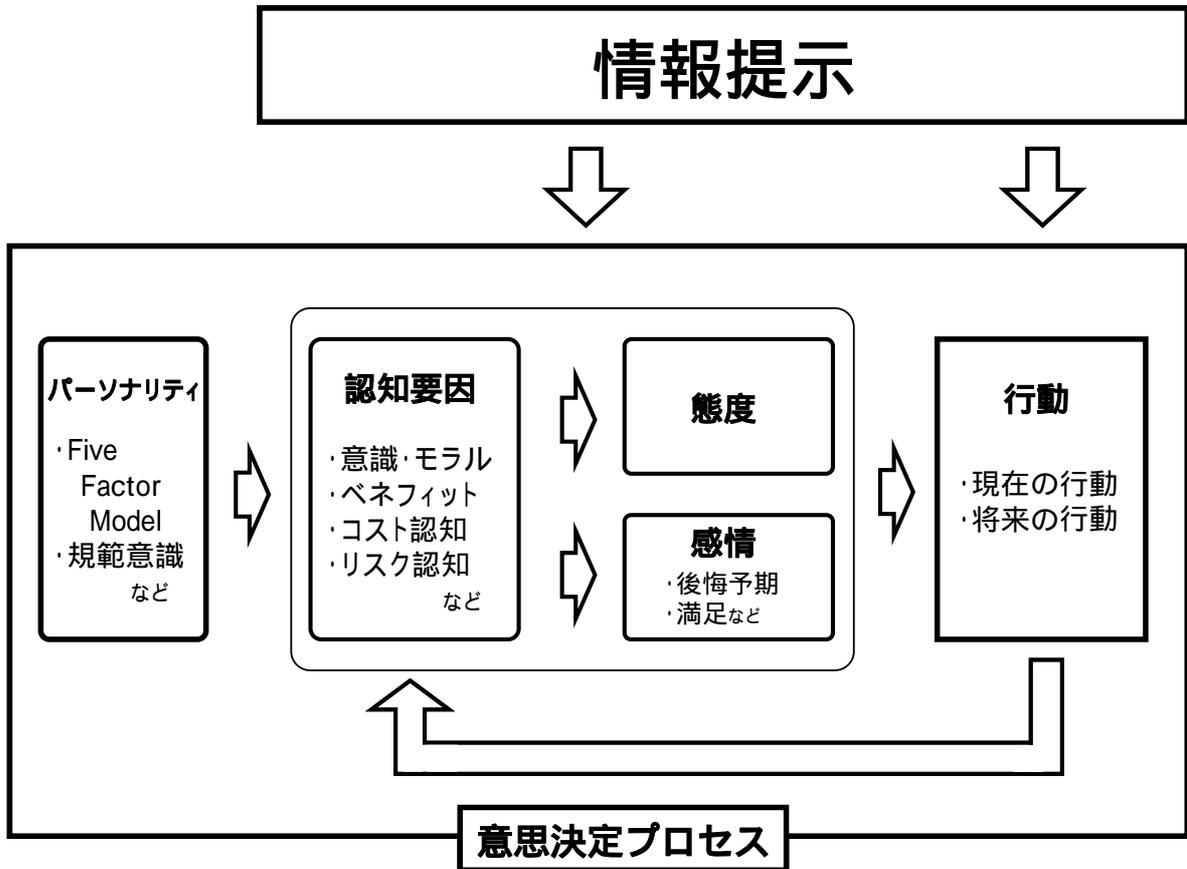


Figure 4 本研究で提案するモデル

(4) 要約

本研究では、逸脱行動に影響を及ぼす要因を特定し、逸脱行動を適切な行動へ変化させるための方法について検討するために、調査および実験をおこなった。調査については、逸脱行動を規定する要因について共分散構造分析法により検討した。実験については、どのような情報を提示することが逸脱行動を適切な行動に変化させるために有効かということについて検討した。その結果、以下のことが示された。

- 1) 逸脱行動(多重債務, NEET, 不摂生による生活習慣病)は、ベネフィット認知(自分にとってどれくらいメリットがあるか)やコスト認知(逸脱行動を避けるためにどれくらい労力をかけることができるか)が態度(行動促進, 行動抑制)を介し、逸脱行動を規定していること、および意思決定スタイル(熟慮して決めているかどうか)、リスク帰属(自分に責任があると感じているかどうか)、モラル・意識がリスク認知(逸脱行動をおこなうことの危険性, デメリット)や後悔予期(逸脱行動をして悪い結果が生じたとしたらどれくらい後悔を感じると思うか)を介して、逸脱行動に影響すること。
- 2) 一ヶ月間以上のボート合宿において、Five Factor Model の外向性、調和性、誠実性などが高い人は、長期間の集団生活におけるストレスにうまく対処でき、不適切な行動(他人に八つ当たりする、合宿を放棄するなど)の行動をとらない傾向があること。
- 3) 不適切な行動を適切な行動へ変えるために必要なこととして、提示される情報の内容と情報を提示される側の意識が重要であること。
 - (a) 大学生の喫煙に関しては、恐怖を喚起するパッケージ(カナダ)を提示した方が、あまり恐怖を喚起しないパッケージ(日本)よりも、「タバコはやめられる」という意識が強くなる
 - (b) 音楽 CD の違法コピーに関しては、規範意識が高い人に違法コピーのできない音楽用 CD (CCCD) に対するポジティブな情報を与えることにより、著作権に対する意識が高まるが、規範意識の低い人にはあまり効果がない。

これらのことから、逸脱行動が生起する原因は、あまり熟慮せずに意思決定することや誤った認識をしているためと考えられる。よって逸脱行動を適切な行動へ変えるためには、個人差を考慮した上で、適切な情報を提示し、熟慮して意思決定するように促すことが重要であることがわかった。

4 主な研究成果

4.1 生活リスク行動を規定する要因と対処行動

- 生活習慣病，多重債務，ニートに関する大学生の意識調査 - 1 1

4.2 パーソナリティが特殊環境における対人行動の時系列変化に及ぼす影響

- ボート競技における長期合宿に関する調査 - 2 5

4.3 情報提示とパーソナリティがタバコに対する意識に及ぼす影響..... 5 0

4.4 規範意識と情報提示が消費者行動に及ぼす影響

- 音楽用 CD の違法コピーに関する検討 - 6 1

4.1 生活リスク行動を規定する要因と対処行動

- 生活習慣病，多重債務，ニートに関する大学生の意識調査 -

研究代表者 上市秀雄 筑波大学大学院システム情報工学研究科講師

研究分担者 楠見 孝 京都大学大学院教育学研究科助教授

研究要旨

本研究の目的は，日常生活において遭遇する様々な生活リスク行動（多重債務，NEET，生活習慣病）に関して，これら行動を規定する要因と対処行動を統一的に説明するためのモデルを提案することである。大学生 190 人に対する調査の結果，3つの状況に共通するプロセス：ベネフィット認知 コスト認知 態度 現在の生活リスク行動 将来の生活リスク行動，多重債務と NEET に共通するプロセス：意思決定スタイル リスク帰属 モラル・意識 リスク認知 後悔予期 現在の生活リスク行動 将来の生活リスク行動というプロセスが存在することがわかった。このことから，熟慮して意思決定することや，あるいはモラルや意識を高めることが生活リスク行動を適切な行動に変えるために必要であることが示唆された。

1. 研究目的

本研究の目的は，日常生活において遭遇する様々な生活リスクに関して，これらリスクに対する認知と対処行動を統一的に説明するためのモデルを提案することである。

生活リスクとは，一般的な人が営む生活ができなくなる危険性・可能性のことである。そのリスクは，喫煙や生活習慣の乱れによる病気，不注意な運転や無謀運転などが原因で起こる事故による怪我），浪費やギャンブルによる借金などの金銭的リスク，就労や結婚などの人生に関するリスクなどに分類することができる（e.g., 上市・楠見，1998a）。

現在，個人的な生活リスクに関して社会問題化したリスクも存在する。私たちの身体に関することでは，生活習慣病（インスリン非依存性糖尿病，肥満，高脂血症，高血圧症など）のうち糖尿病に関しては，平成 14 年糖尿病実態調査報告（厚生労働省）によると，糖尿病の可能性を否定できない人は約 880 万人で，5 年間で約 200 万人増えていると推計されている。金銭に関することでは，多重債務があげられる。多重債務による自己破産の件数は年々増加しており，平成 16 年度司法統計年報（最高裁判所）によれば，自己破産申立件数は 20 万件を超えており，10 年前の 5 倍になっている。また人生に関することでは NEET（Not in Employment, Education or

Training:職についておらず、学校機関にも所属しておらず、就労に向けての具体的な働きをしていない労働可能な 15 - 34 歳までの家事手伝いを含む若者)がある。現在 NEET は約 52 万人存在する(2004 年版労働経済白書,厚生労働省)。

従来の生活リスクに関する研究では、生活リスクを高める行動全体を統合的に取り扱っていない。たとえば青少年の喫煙・ドラッグに関する研究(Zuckerman, 1994; Zuckerman, Buchsbaum, & Murphy, 1980), 無謀運転(Bromiley & Curley, 1992), 無気力(Seligman, 1991), 社会的引きこもり(social withdrawal:齊藤,1998), など個別におこなわれている。また、人間の行動を統合的に説明する理論モデルには、Cognitive-Affective Personality System (Mischel & Shoda, 1995; Shoda & Mischel, 1998) や、リスク動機理論(Trimpop, 1994)があるが、生活リスク行動を体系的に取り扱っていない。

上市(2003), 上市・楠見(1998a, 1998b, 2000, 2006)は、身体的リスク(病気, 事故など), 金銭的リスク(投資, 盗難など), 人生に関するリスク(失業, 解雇など)に関する意思決定プロセスを実験および調査によって検討した。その結果, 知識・能力 リスク認知 行動, 回避意識 コスト認知 行動, という2つのプロセスの存在, および後悔が次回の意思決定に影響することを示した。自分の行動に対する後悔に関しては, 意思決定スタイルを取り上げ, 分析型の方が直観型と

比較して後悔が小さいことを示した(上市・楠見, 2004)。

そこで本研究では, 社会問題化した生活リスク状況の代表例として生活習慣病(身体的状況), 多重債務(金銭的状況), ニート(人生に関する状況)を取り上げる(Table 1)。そして上市(2003), 上市・楠見(1998a, 1998b, 2000)の結果を, これら社会問題化した生活リスクに適用することにより, 不適切な行動にいたるプロセスだけでなく, 日常的におこなっている不適切な行動を改善させるための何らかの方法を提案することが可能になると考える。

2. 方法

調査対象者 大学生 190 名(男性 117 名, 女性 71 名, 不明 2 名)。質問冊子を 2005 年 12 月に配布回収した。

質問項目

(a)意思決定スタイル

自分の行動を決定する際にどの程度考えるかを測定する尺度。生活習慣病, 多重債務, NEET の各状況において, “現状を把握して, 今後のことについてどうすればよいかよく考えている(分析型項目)”, “自分の気持ちに従ってやりたいようにする(直観型項目)”を5段階(1:あてはまらない~5:あてはまる)で評定させた。

(b)認知要因

()情報接触 生活リスクに関する情報に対してどの程度接触しているかを測定する

尺度。“生活習慣病(多重債務, NEET)に関する記事を読んでいる”, “ニュースに興味がある” “公官庁のパンフレットやポスターを見ている”, “Web をチェックしている” など4項目で測定した。5段階で評定させた。

()ベネフィット認知 生活リスクを増加させるような行動に対してどの程度ベネフィットを感じるかについて測定する尺度。生活習慣病“ 外食した方が毎日自炊するよりも便利だ”, “インスタント食品やレトルト食品は便利だ”, “コンビニ弁当は便利だ”, “自分の好きなものを食べる方が食事が楽しい”, 多重債務“キャッシングは便利だ”, “カードローンの借入限度額は多い方がよい”, “クレジットカードがあればお金がなくても好きなときに買い物ができる”, “ゴールドカードは社会的地位が高い”, NEET “NEET は自分らしい生活ができる”, “会社に縛られていなくてよい”, “自由な時間がある”, “わずらわしい人間関係がなくてよい”などの項目を用い, 5段階評定させた。

()コスト認知 生活リスクを回避するための行動をとることにどの程度コスト(めんどくささや困難さ)を感じるかを測定する尺度。生活習慣病“規則正しい生活をするのは困難だ”, “適度な運動することはめんどうだ”, “自炊することはめんどうだ”, “インスタント食品を食べずに生活することは困難だ”, “コンビニ弁当を食べずに生活することは困難だ”, 多重債務“毎月貯金することは困難だ”, “現金支払いはめんどうだ”,

“毎月決まった金額で生活することは困難だ”, “親から金を借りず, 無駄遣いをして足りなくなった生活費で月末まで生活することは困難だ”, “ほしいものをお金が貯まるまで我慢することは困難だ”, “カードローンを利用せずに生活することは困難だ”, NEET “就職に有利な資格を取るとはめんどうだ”, “就職や進学することは自分には困難だ”, “他人とコミュニケーションを取るとはめんどうだ”, “他人と接することにストレスを感じる”, “自分で物事を解決することは労力がかかる”, “就職活動はめんどうだ”, “人と同じような社会生活を営むのが困難だ”などの項目について5段階評定させた。

()リスク認知 生活習慣病“不規則な生活をするると生活習慣病になる”, “適度な運動をしないと健康を損なう”, “外食を続けると生活習慣病になる”, “コンビニ弁当ばかり食べると生活習慣病になる”, “好きなものばかりを食べると生活習慣病になる”, 多重債務“キャッシングすると社会的信用が下がる”, “カードローンの利息が高い”, “カードローンの利用は知らないうちに借入金が増える”, “多重債務になる可能性が高い”, “カード利用は通常の生活に支障をきたすようになる”, NEET “NEET でいると社会的信用が下がる”, “長期的な資産管理ができない”, “自分のほしいものが入手できない”, “普通の人生が歩めない”, “結婚できない”, “社会生活が営めない”などの項目について5段階評定させた。

()リスクコントロールラビリティ 生活リスクをどの程度自分でコントロールできるかを測定する尺度。生活習慣病“自分が気をつけることで生活習慣病は避けることができる”、“規則正しい生活をしていれば健康を維持できる”、“ある程度の年齢になれば否が応でも生活習慣病になる”、多重債務“節度を持ってカードを利用すればお金を返せなくなることはない”、“カード破産は本人に責任がある”、“カード破産者ができるのは支払い不能になるくらい金融会社がお金を貸すからだ”、“計画的に利用しても何らかの原因で支払いができなくなることもある”、NEET“NEETになるのは本人に責任がある”、“親に責任がある”、“NEETになるのは自分の力を発揮する場所がないからだ”、“ある程度の年齢になれば否が応でも働き出す”などの項目について5段階評定させた。

()モラル・意識 生活リスクに対するモラルや意識について測定する尺度。生活習慣病“規則正しい生活をするのは健康維持に必要なだ”、“好きなものだけ食べていたい”、“いつまでも健康でいたい”、“自分が生活習慣病になるのではないかと不安になる”、多重債務“借金は絶対に返さなければならない”、“借金があったとしても何とかできる*（*は反転項目）”、“借金は誰でもすることだ”、“カードローンを利用したとしても自分は大丈夫”、NEET“就職は絶対にしなければならないことだ”、“フリーターでも生活はできる”、“自分の将来にこだわりがある”などの項目について5段階評定させた。

(c)感情

後悔予期 “将来悪い結果が起こったとしたら、今まで行なってきた行動をどの程度後悔するか”ということ測定する尺度。生活習慣病“食生活を改善しなかったため生活習慣病になったとしたら後悔する”、“不規則な生活をしたため生活習慣病になったとしたら後悔する”、“適度な運動をしなかったため生活習慣病になったとしたら後悔する”、多重債務“キャッシングやカードローンで多重債務になったとしたら後悔する”、“カードローンを利用したため社会的信用が下がったとしたら後悔する”、“カードローンを利用したことにより多重債務に陥ったとしたら後悔する”、NEET“卒業後就職しなかったため通常の社会的生活が営めなくなったとしたら後悔する”、“就職しなかったため社会的評価が下がったら後悔する”、“就職しなかったため将来社会復帰できなかったら後悔する”などの項目について5段階評定させた。

(d)態度

()行動促進 生活リスクの危険性を促進させる態度をどの程度とっているかを測定する尺度。生活習慣病“運動は苦手だ”、“おなかいっぱい食べないと食事した気にならない”、多重債務“欲しい物があると買ってしまう”、“ローンにすれば買えると思ってしまう”、“月収以上の生活がしたい”、“多重債務になれば自己破産すればよい”、“一時的にお金が足りなくなったらキャッシングすればよい”、NEET“良好な人間

関係を築くのが苦手だ”，“やりたいことがわからない”，“自分の適性がわからない”，“社会に出ることに不安を感じる”，“社会になじめないと思う”，“能力を發揮できる場所がない”，“何事に対してもやる気が起きない”，“自分自身に自信がない”などの項目について5段階評定させた。

()行動抑制 生活リスクの危険性を抑制する態度をどの程度とっているかを測定する尺度。生活習慣病“健康のためなら嫌いなものでも食べることに抵抗はない”，“野菜を食べるようにしている”，“栄養バランスに気をつけている”，“体重に気をつけている”，多重債務“金利や返済期間が気になる”，“借金は一度に返したい”，“欲しい物を我慢することは簡単だ”，“欲しい物を買うために貯金することは簡単だ”，NEET“将来就きたい仕事が明確だ”，“他人よりもよい生活をしたい”，“自分の能力を發揮したい”，“困難なことでも自分の能力を高めることをやってみたい”，“今のままではだめだと思う”，“就きたくない仕事を把握している”などの項目について5段階評定させた。

(e)リスク行動

リスク行動を，現在おこなっている生活リスク行動の程度と，“もし将来 という状況になったとしたらどうしますか”という架空状況下での将来の生活リスク行動する程度の二種類の行動を測定する項目について5段階で評定させた。

生活習慣病 現在の行動“規則正しい生活をしている*”，“定期的な運動をしてい

る*”，“外食をしている”，“インスタントや冷凍食品を食べている”，“コンビニ弁当を食べている”，“自分の好きな物を食べている”，“肉類をたべている”。将来の行動“健康診断で以上がない限りは特には食生活に気をつけない*”，健康診断で以上がない限りは今まで通りの生活スタイルを続ける*”

多重債務 実際の行動“毎月貯金している”，“生活に不必要な物を買って生活費が足りなくなったこと*”，“月収（一月の生活費）以上にお金を使ったこと*”，“無駄遣いをして足りなくなった生活費を親や友人に借りたこと*”，“親や知人にお金を借りて生活に不必要なものを買った*”。将来の行動“手元にお金はなくても欲しいものがあつたときにはカードローンを利用する*”，“手元にお金はないがボーナスで一括払いができるとき一括払いで物を買うこと*”。

NEET 実際の行動“就職や進学をする気がない”，“就職をあきらめている”，“何もせず一日が過ぎる”，“わずらわしい対人関係を避けている”，“家族以外の人と接していない”，“自分で解決できることでも身内に頼っている”，“就職に有利になる勉強をしている*”。将来の行動“働かなくても生活できるのならば就職しない*”，“自分の希望に反する職業には就職しない*”，“やりたいことが見つからない限り就職はしない*”。

なお * はリスク回避行動をあらわす反転

項目である。

(f)行動選択

ビニエット法を用いて架空の状況を設定し、二者択一法によって日常的な生活リスク行動を測定した。

生活習慣病 “今のままでは生活習慣病になるといわれましたが、自覚症状は全くありません。今すぐ生活スタイルを変えますか（適切行動）、それとも続けますか（不適切行動）”

多重債務 “どうしても欲しいものがありました。もう二度と手に入らないかもしれません。しかし口座には十分なお金がありません。クレジットカードで購入しますか？”

NEET “就職活動の時期になりましたが、あなたはやりたいことも自分の適性もよくわかりません。あなたは就職しますか？”

(g)生活リスク予測確率

将来自分自身が、生活習慣病、多重債務、ニートになる確率を0～100%で測定。

分析方法 Amos 4.0 を使用

3.結果と考察

行動選択の人数を Table 1 に示す。8-19%程度の人には、将来の生活リスクを高めるような不適切行動をする傾向があることが示された。

つぎに適切 - 不適切行動者間の認識の差異を検討するために、t 検定をおこなった。その結果、状況に共通して有意差が認められた要因は、コスト認知、リスク認知、リスク

回避行動であった。また将来自分が不適切行動者になるかどうかの将来の生活リスク予測確率(%)に関して、適切行動選択群と不適切行動選択群に差があるかどうかを調べるために t 検定をおこなった。その結果、ニート ($t(163)=-3.329$, $p<.001$; 就職する $M=12.59$ ($SD=18.943$) < 就職しない $M=31.07$ ($SD=28.701$)), 多重債務 ($t(179) =2.117$, $p<.036$; キャッシングしない $M=11.51$ ($SD=16.470$) < キャッシングする $M=18.56$ ($SD=19.767$))に有意差があった。つまり不適切な行動をする人は、生活リスクを避けるためのコストを払いたくないと感じ、不適切な行動による生活リスクを過小評価し、不適切な行動をする傾向が高かった。しかし同時に自分自身の将来の生活リスクに関しては、高く認知していることもわかった。この相反する結果は、日常的な意思決定プロセスと将来に対する長期的な意思決定プロセスが異なることを示唆していると考えられる。

要因間の関連性の分析

生活習慣病（身体的状況）、多重債務（金銭的状況）、NEET（人生に関する状況）の3つの状況ごとに、各要因間の関連性を共分散構造分析法を用いて分析した。モデル内の各誤差については、平均0、分散1以内になるように制約した。また図中の γ は顕在変数、 λ は潜在変数を表す。

生活習慣病に関する要因間の関連性を Figure 1 に示す。

情報接触はコスト認知（パス係数：-.29）に影響を及ぼし、そしてコスト認知が態度の行動促進（.71）および行動抑制（-.18）を介して、今現在のリスク行動に影響を及ぼしていることが示された。また将来のリスク行動は、態度の行動抑制（-.50）と現在のリスク行動（.20）の影響を受けていることも示された。これは、生活習慣病に関する記事を読んだりニュースに興味のある人ほど、規則正しい生活をしたり適度な運動をすることや自炊することを面倒だと感じたり、インスタント食品やコンビニ弁当なしで生活ができないと考える。そのため、満腹感を感じるまで食べようとしたりあるいはバランスのよい食事に気をつけられない傾向があるため、不規則な生活をしたり、外食やインスタント食品や好きなものだけを食べる傾向があることを意味している。また、バランスのよい食事に気をつけなかったり、現在規則正しい生活などをしていない人は、将来“健康診断で以上がない限りは特に食生活に気をつけない”、“健康診断で以上がない限りは今まで通りの生活スタイルを続ける”というようリスク行動をとることもわかった。

多重債務に関する要因間の関連性を Figure 2 に示す。

意思決定スタイルはリスク帰属（.33）を介しモラル・意識（.79）に影響を及ぼし、そしてモラル・意識は直接およびリスク認知を介して、後悔予期（モラル・意識からのパス係数.32, リスク認知からのパス係数.67）に影響を及ぼし、そして後悔予期は現在のリ

スク行動（-.40）および将来のリスク行動（-.16）に影響を及ぼしていることが示された。これは、あまり考えずに決める人ほど、多重債務に陥る原因を本人のせいだと考えない傾向があり、借金しても大丈夫だと考える。そのためカードローンやキャッシングを危険ではないと感じるため、カードローンを利用することで多重債務になったとしても後悔する傾向が低い。その結果、無駄遣いしたり生活費以上にお金を使ってしまう傾向があることを意味している。それに加え多重債務になったとしても後悔しない傾向の高い人は、将来ほしいものがあつたとき、ローンやキャッシングして購入する傾向が高いことがわかった。また、また意思決定スタイルはリスク帰属およびベネフィット認知を介してコスト認知に影響を及ぼしていた。コスト認知は態度の行動促進（.52）および行動抑制（-.31）を介して、現在のリスク行動に影響を及ぼしていることが示された。これは“お金が貯まるまで我慢できない”、“ローンを使用しないのは難しい”と考える人ほど、ほしいものをつい買いたくなったり、ほしいものを我慢できない傾向があるため、浪費する傾向が高いことを意味している。

NEET に関する要因間の関連性を Figure 3 に示す。

意思決定スタイルはリスク帰属（.28）に影響を及ぼし、そして直接的あるいはベネフィット認知を介して、コスト認知に影響を及ぼしていた。これは、あまり深く考えずに決める人ほど、NEET になるのは本人の責任では

ないと考える傾向があり、その結果“NEETは自由な時間があるってよい”などと考え、“就職活動はめんどろだ”と考える傾向があることを意味している。またこのコスト認知は、態度の行動促進(.53)および行動抑制(-.33)を介して、現在のリスク行動に影響を及ぼしていた。これは“就職は面倒だ”、“他人とコミュニケーションをとることが難しい”と考える人ほど、“社会に出ることに不安を感じる”、“よりよい生活をのぞまない”と考える傾向があるため、就職をあきらめたり、他人とのコミュニケーションを避ける行動をとることを意味している。

各状況に共通する関連性

生活習慣病(身体的状況)、多重債務(金銭的状況)、NEET(人生に関する状況)全てに共通して、ベネフィット認知 コスト認知 態度(行動促進, 行動抑制) 現在のリスク行動 将来のリスク行動, という関連性が認められた。これは不適切な行動に対して何らかのメリットを感じる傾向が高い人ほど、適切な行動をとることを“めんどろである”と感じる傾向があることを示している。そして適切な行動をとることをめんどろであると感じる人ほど、不適切な行動を促進する態度を持つが、不適切な行動を抑制する態度をあまり持たないため、現在不適切行動をとっていることを意味している。また現在不適切な行動をとっている人は、将来も不適切な行動をとる傾向が高いことを示している。

多重債務とNEETに共通して、モラル・意識 リスク認知 後悔予期 現在のリスク行動という関連性が示された。これは不適切な行動に対するモラルや意識が低い人ほど、“自分は大丈夫だ”というように不適切な行動に対する認識があまく、そして自分が失敗したとしても後悔しない傾向があるため、不適切な行動をとっていることを意味している。

上記のことは、不適切な生活リスク行動が生起するプロセスには、態度によって規定されるプロセスと、後悔という感情によって規定されるプロセスの2つがあると考えられる。上市・楠見(2000)では、意識(不安感) 感情(後悔予期) リスク行動というプロセスが状況をこえて存在することが示されているが、本研究においても同様に、リスク認知を媒介しているが、モラル・意識 後悔予期 生活リスク行動というプロセスが認められた。この関連性は、状況をこえて、人々のリスク行動を規定するプロセスとして重要であることを意味するものと考えられる。また本研究の結果より、認知要因は直接的に生活リスク行動に影響するというより、態度や感情を媒介して生活リスク行動に影響を及ぼしていると考えられる。

本研究から示唆されることは、不適切な生活リスク行動を適切な行動へ変えるためには、態度だけではなく、後悔という感情を喚起させることが必要であるということである。従来、人間の行動は態度によって規定されていると考えられてきた。態度は人の行動

が発露される直前の内的状態とされているが、本研究の結果より、この内的状態には感情要因も関連していると考えられる。上市・楠見（2006）は、情報量が認知要因や感情要因を規定する要因として重要であることを示した。本研究では、情報量ではなく、情報接触量を用いたため、それほど生活リスク行動を規定する要因として重要ではなかった。ただそれでも情報接触量は、生活習慣病（身体的状況）ではコスト認知に、NEET（人生に関する状況）ベネフィット認知に影響を及ぼしている。これらのことは、情報に接触することが私たちの行動を規定する要因として重要であることを示唆している。

4.まとめ

3つの異なった状況（生活習慣病，多重債務，NEET）に関して，不適切な生活リスク行動に影響を及ぼす要因間の関連性について検討した。その結果，3つの状況に共通するプロセス：ベネフィット認知 コスト認知 態度 現在の生活リスク行動 将来の生活リスク行動，多重債務と NEET に共通するプロセス：意思決定スタイル リスク帰属 モラル・意識 リスク認知 後悔予期 現在の生活リスク行動 将来の生活リスク行動というプロセスが存在することがわかった。このことは，生活リスク行動を規定するプロセスには，認知要因が規定するプロセスと，感情要因が規定するプロセスの2つがあることを示している。また生活リスク行動を適切

な行動にかえるためには，熟慮して意思決定をさせるようにすることや，たくさんの情報に接触させて，リスク認知を高め，コスト認知を低くさせることが必要であることが示唆された。

5.参考文献

- Bromiley, P., & Curley, S.P. 1992 Individual differences in risk taking. In J.F. Yates (Eds.), *Risk-taking behavior*. New York : John Wiley & Sons Ltd. Pp.87-132.
- 厚生労働省 2002 平成 14 年糖尿病実態調査報告 厚生労働省
- 厚生労働省 2004 2004 年版労働経済白書 厚生労働省
- Mischel, W., & Shoda, Y. 1995 A cognitive-affective system theory of personality : reconceptualizing situation, disposition, dynamics, and invariance in personality structure. *Psychological Review*, 102, 246-268.
- 最高裁判所 2004 平成 16 年度司法統計年報 最高裁判所
- 斉藤環 1998 社会的引きこもり：終わらない思春期 PHP 新書
- Seligman, M.E.P 1991 *Learned optimism*. New York : A.A. Knopf.
- Shoda, Y., & Mischel, W. 1998 Personality as a stable cognitive-affective activation network: characteristic

- patterns of behavior variation emerge from a stable personality structure. In S. J. Read & L. C. Miller (Eds.), *Connectionist-models of social reasoning and social behavior*. London : Lawrence Erlbaum Associates. 175-208.
- Trimpop, R. M. 1994 *The Psychology of Risk Taking Behavior*. North-Holland.
- 上市秀雄・楠見孝 1998a パーソナリティ・認知・状況要因がリスクテイキング行動に及ぼす効果, 心理学研究, 69(2), 81 - 88 .
- 上市秀雄・楠見孝 1998b 損失状況におけるリスク行動の個人差を規定する要因: 分散構造分析法による検討, 日本リスク研究学会誌, 10(1), 65 - 72 .
- 上市秀雄・楠見孝 2000 後悔がリスク志向・回避行動における意思決定に及ぼす影響: 感情・パーソナリティ・認知要因のプロセスモデル, 認知科学, 7(2), 139-151 .
- 上市秀雄・楠見孝 2004 後悔の時間的变化と対処方法: 意思決定スタイルと行動選択との関連性, 心理学研究, 74(6), 487 - 495 .
- 上市秀雄・楠見孝 2006 環境ホルモンのリスク認知と回避行動, 認知科学, 13, 32-46.
- Zuckerman, M. 1994 *Behavioral expression and biosocial bases of sensation seeking*. New York: Cambridge University Press.
- Zuckerman, M., Buchsbaum, M.S. & Murphy, D. L. 1980 Sensation seeking and its biological correlates. *Psychological Bulletin*, 88, 187-214.

Table 1 生活リスクに関する行動選択の人数 (%)

リスク行動の状況	適切行動	不適切行動
身体的状況		
生活習慣病	161 (84.7)	29 (15.3)
金銭的状況		
多重債務 (キャッシング)	154 (81.1)	36 (18.9)
人生に関する状況		
NEET (就職活動)	175 (92.1)	15 (7.9)

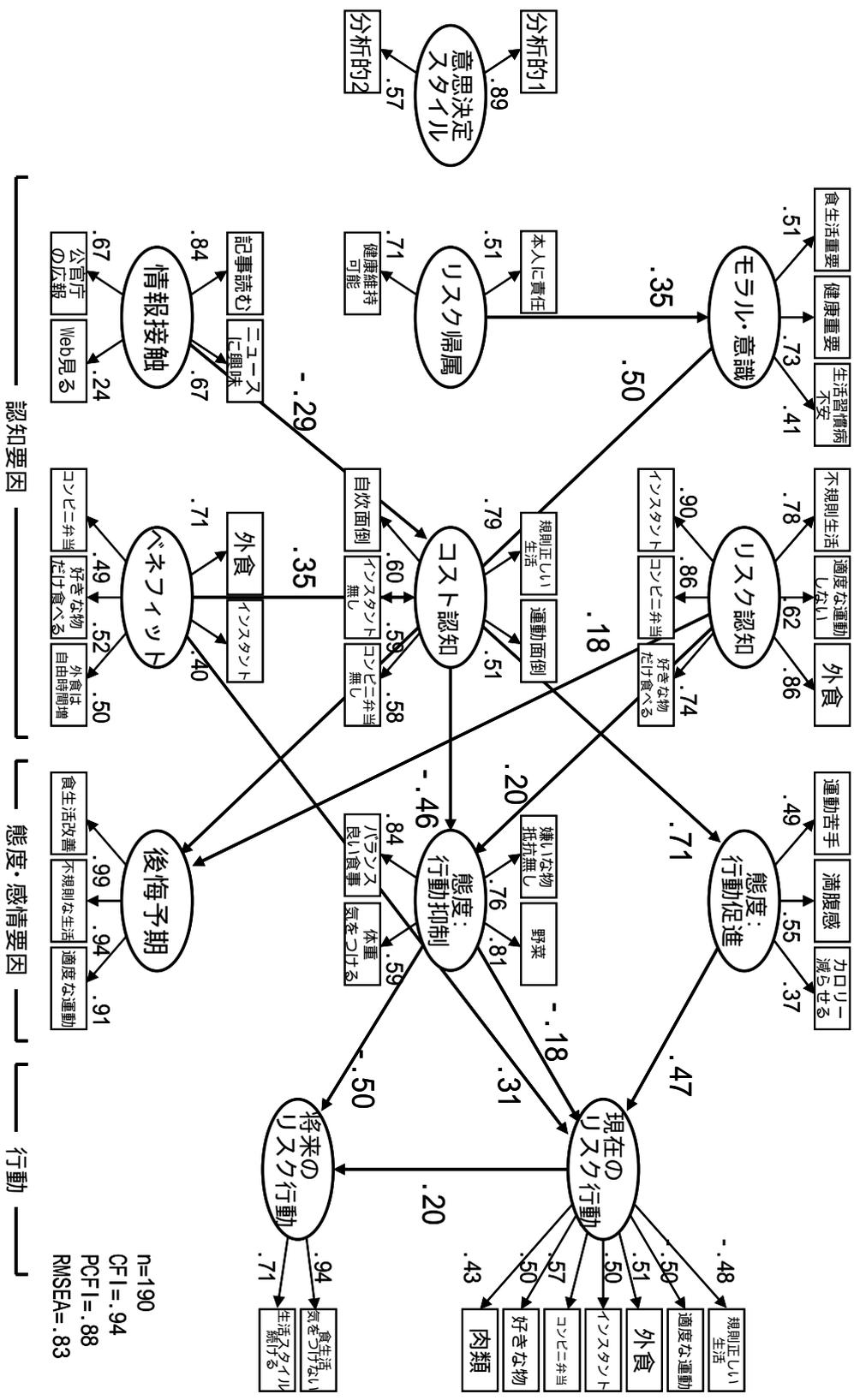


Figure 1 生活習慣病に関する因果モデル

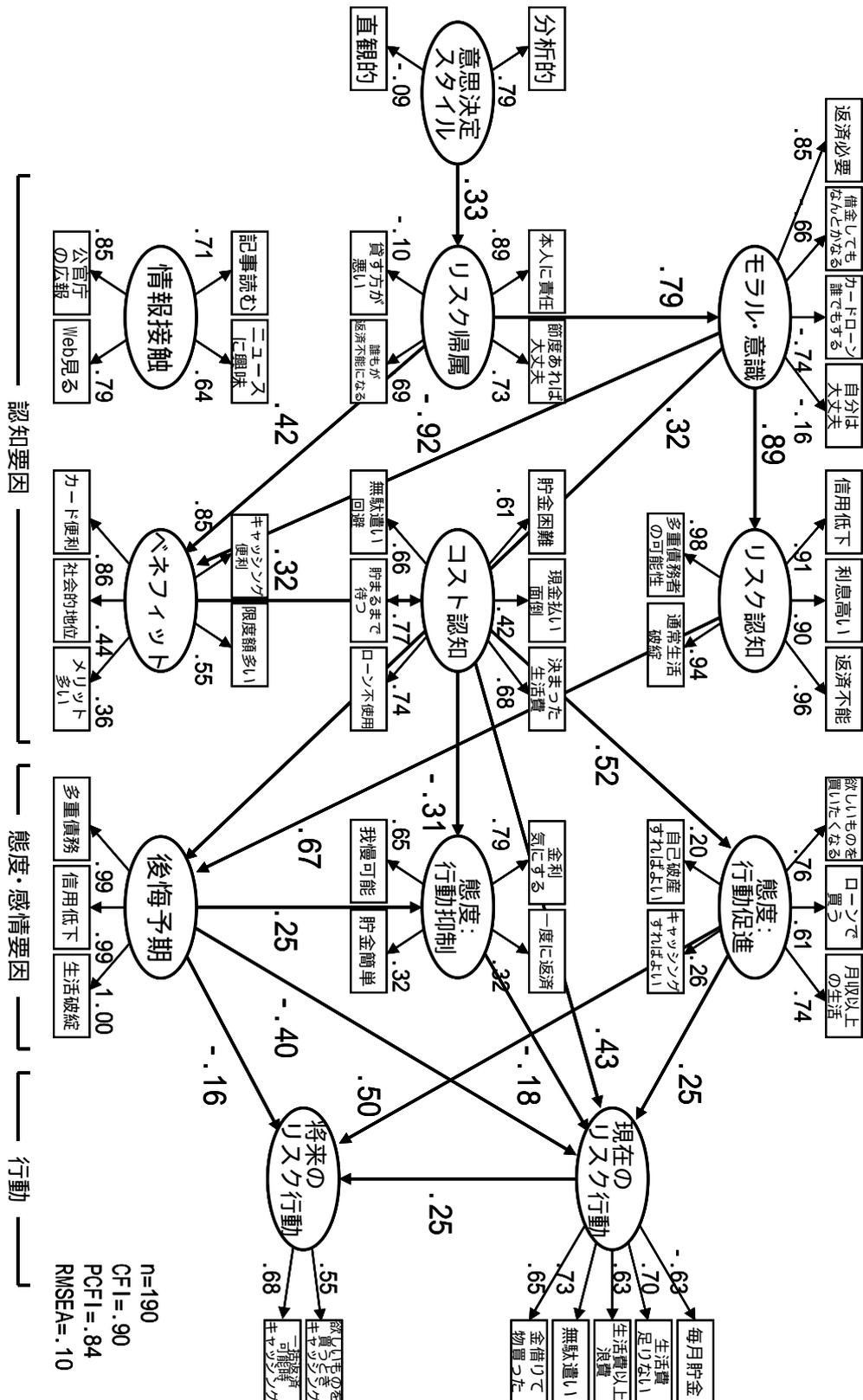


Figure 2 多重債務に関する因果モデル

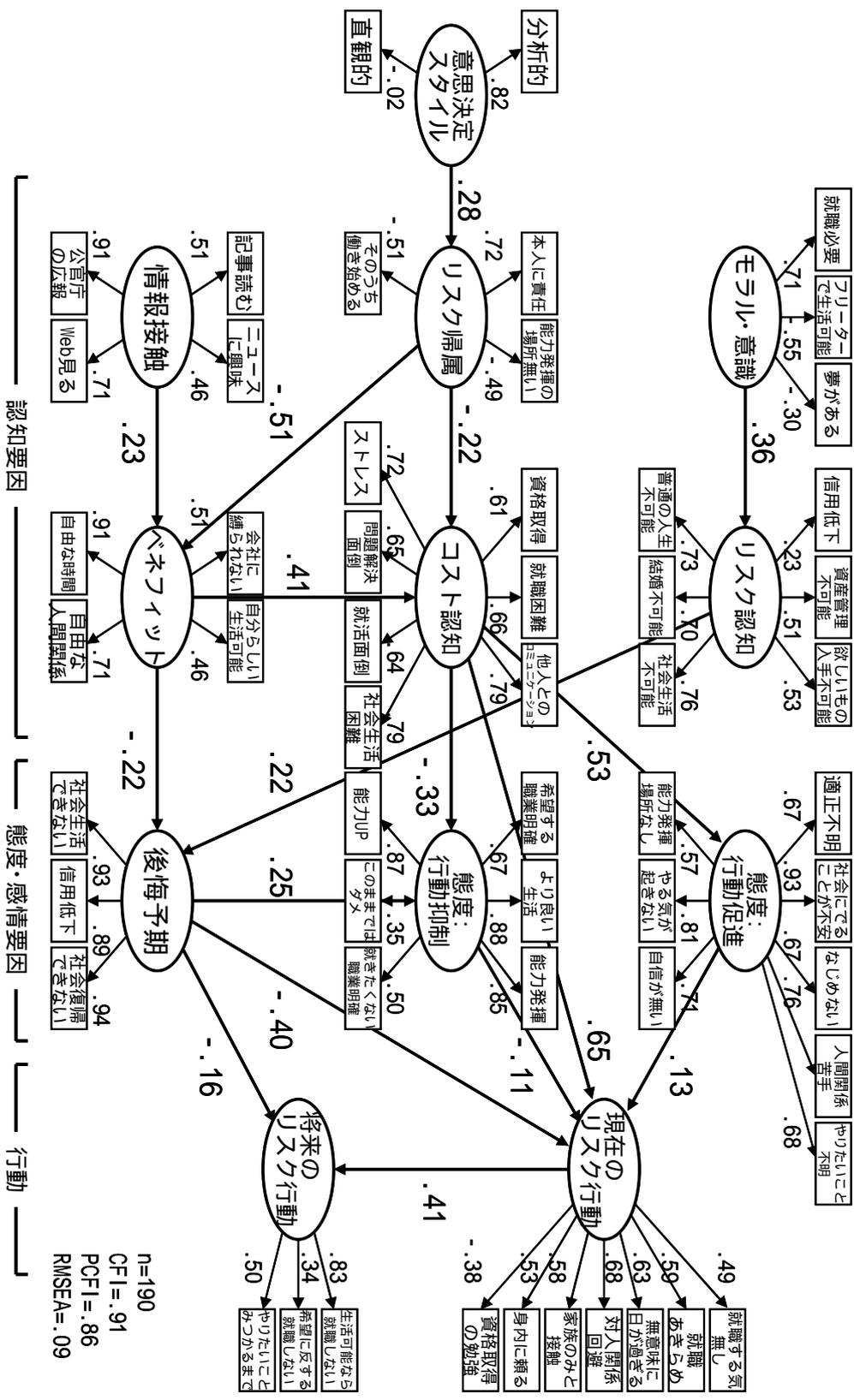


Figure 3 NEETに関する因果モデル

4.2 パーソナリティが特殊環境における対人行動の時系列変化に及ぼす影響

- ボート競技における長期合宿に関する調査 -

研究代表者 上市秀雄 筑波大学大学院システム情報工学研究科講師

研究協力者 篠岡 隆 筑波大学社会工学類

研究要旨

長期間、他人と集団生活をする事は大きなストレスである。人は他人と長期間一緒にいるだけでストレスを感じる。ほかにも集団生活においては、孤独感、プライバシーの欠如などのストレスも感じる (Kahn & Leon, 2000)。それらストレスが原因で人間関係のトラブルも生じる場合もある。本研究では、長期間閉鎖された環境における集団生活を円滑にするための要因として Five Factor Model, ストレス, コミュニケーション, 情動, 後悔, パフォーマンス, 行動 (ストレス対処行動, 不適切な行動など) を取り上げ、それら要因間の全体の関連性の時系列的变化を検討した。方法 1ヶ月間のボート合宿を行う T 大学の大学生 (男 15 名, 女 2 名) を対象に、質問紙調査を行った。測定は、2005 年 7 月 19 日 ~ 8 月 12 日の間においてほぼ毎日、朝トレーニングが行われた日の朝食後に行った。その結果、パーソナリティの外向性が高い人ほどストレスをあまり感じないこと、感じたストレスに対して適切に対処できることがわかった。パーソナリティの調和性と誠実性が高い人ほど、時間経過とともにストレスや緊張覚醒 + が減少した。調和性と誠実性は、自己管理能力に影響を与えていた。本研究の結果より、パーソナリティの外向性、調和性、誠実性などが高い人は、長期間の集団生活におけるストレスにうまく対処でき、不適切な行動 (他人に八つ当たりする、合宿を放棄するなど) の行動をとらないことが明らかとなった。

1. 研究目的

本研究の目的は、閉鎖された環境において、パーソナリティと対人行動や情動との関係が、時間経過とともにどのように変化していくかを明らかにすることである。

人々は生活する上で様々な場面で様々な行動をとる。辻(1998)は、“同じ状況下にお

いても人が同じ行動をとるわけではない。反対に、全く違う状況下において、同じ共通性のある行動の傾向が見られることもある。このような共通点の背後で、人の意思や感情、行動などに一貫性を与えると考えられるのがパーソナリティである”としている。実際にパーソナリティが行動や感情にどの程度の影響を与えるかを検証するために、Five

Factor Model (辻・藤島・辻・夏野・向山・山田・森田・秦, 1997) を用いた多くの研究で行われている。例えばその中の誠実性は職務遂行における予測因として、進路適性検査(和田・池田, 1995)に用いられている。職務遂行などの行動に関する要因の一つとして、人の内的要因のストレスも挙げられる。ストレスもやはりパーソナリティと大きな関わりを持っていると考えられている。調和性は対人ストレス全般と負の相関を示し(橋本, 1999), 外向性は対人劣等に負の相関を示す。しかし誠実性は対人磨耗, 対人劣等, 対人ストレス全般の三つのいずれも関連を示さず, その要因として, 誠実性が高い人, 低い人それぞれのストレスがあるからではないかと考えられている。外向性は対人関係において積極性の因子と考えられる(Eysenck, 1970; 1991)。また, 外向性が高い人ほどより多くのソーシャルサポートを提供していると認識される傾向にあり, 実際にサポートをされることに敏感であるために自分自身もサポートを提供しやすいという可能性が示唆されている(Cutrona et al., 1997)。だが, そのサポート関係が長い期間によってどのように変化していくのか, 変わらないメンバー間であって実際にサポートを続けていくのかどうかという, 時系列的な変化に関する研究については言及されていない。

また特殊な環境における行動の研究として Alling (2002) がある。この研究では, 2年間閉鎖空間で共同生活する場合に, コミュ

ニケーションの取り方が問題の効率的な解決方法の発見行動に大きな影響を与えていることを示唆している。しかしながらこの研究では, 自らの意思で参加している特殊環境(たとえば合宿など)において, 実際の生活の中でパーソナリティがコミュニケーションなどの対人行動にどのような影響を与えるか不明である。

このようにパーソナリティに関する多くの既存研究があるものの, 各パーソナリティの高低の違いによって, 感じるストレスや対人行動に違いがあるのか, またそのパーソナリティの違いが, 感情やストレスなどの内的要因や対人行動に対して時系列的にどのような変化をもたらしているかは検証されていない。本研究では, ボート部の長期合宿という特殊な環境において, パーソナリティと内的要因がどのような関係があり, そしてその関係は時系列的にどのように変化していくのかということを明らかにする。それに加え, 内的要因や対人行動だけではなく, 日常の行動やボート競技のパフォーマンスに関して, それぞれの各要因がどのように関係しているか検証する。

2. 実験

2.1 実験 1

目的

特殊環境下において, パーソナリティ, 認

知要因，行動の全体の関連性が，時間変化によってどのように変化するかを検討する（Figure 1）。本研究では，パーソナリティが，他の認知要因を介して行動に影響を及ぼすと仮定しモデルを構築した（e.g., 上市, 2003; 上市・楠見 1998a; 1998b; 2000; 2006）。今回の実験で扱うパーソナリティの要因は，Five Factor Model（情緒不安定性，外向性，開放性，調和性，誠実性）を用いた。

方法

回答者

埼玉県戸田市のポートコースで合宿生活を行っている大学生を対象に，質問紙法を用いてポート競技における合宿生活の調査を行った。調査対象とした大学は5つで，得られた有効回答数は63人だった。内訳は，男性が42名，女性が20名，不明が1名であった。

合宿の前後による変化の測定を行うために，測定は大会約1ヶ月前にあたる2005年7月と，大会期間中にあたる2005年8月の2点で行い，7月の質問紙と8月の質問紙は全く同じものを使用した。1回目，2回目共に，各大学の代表者を通じて配布回収を行った。

質問項目

体調 体調は，合宿中の睡眠や食事，休息等に関するデータを測定した。ここでは宮下（1994）と小栗（1985）の睡眠に関する調査票を参考にして，就寝時刻，起床時刻，

睡眠時間を測定し，体調面に関しては「寝つきは良い」，「体がだるいと感じる」，「風邪気味だ」など計13項目に関して5段階評定（1：あてはまらない～5：あてはまる）させた。

情動 情動は，織田・高野（1996）を参考にし，恐怖（不安な，びくびくしている，こわい，おびえている），怒り（いらいらしている，不機嫌な，気が立っている，腹が立っている），悲しみ（落ち込んでいる，気が滅入った，悲しい，ふさいでいる），嫌悪（うんざりした，嫌な，嫌悪感がある，不快な），喜び（楽しい，さわやかな，快い，満ち足りた），緊張覚醒+（緊張した，落ち着かない，気が休まらない，），緊張覚醒-（ゆったりした，くつろいだ，落ち着いた），エネルギー覚醒+（活動的な，気力に満ちた，機敏な，エネルギー的な），エネルギー覚醒-（生気がない，無気力な，気分の乗らない）の9因子，計33項目に関して5段階評定（1：あてはまらない～5：あてはまる）させた。

ストレス ストレスはCohen（1983）と，宗像（1986）を参考に，合宿中に感じるストレスを測定した。質問項目は「自分の思い通りに物事が進まない」，「打ち解けていない人がいる」，「周囲の期待にプレッシャーを感じる」など，計10項目からなり，それぞれ5段階評定（1：あてはまらない～5：あてはまる）させた。

コミュニケーション 合宿中の部員同士によるコミュニケーションを測定する尺

度。「自分から積極的に話し掛けている」, 「人の気持ちを考えて会話をしている」, 「人の話をきちんと聞いて受け入れられる」など 12 項目に関して 5 段階評定 (1: あてはまらない~5: あてはまる) させた。

モチベーション 大会やトレーニングに向けてのモチベーションを測定する尺度。

「他の人よりも上手になりたい」, 「自分で立てた目標は必ず達成したいと思う」, 「努力するのは人に負けないためだ」など 11 項目に関して 5 段階評定 (1: あてはまらない~5: あてはまる) させた。

対処行動 合宿中のストレスへの対処法を測定する尺度。尾関・原口・津田(1994), 上市・楠見(2004)を参考にし, 「ストレスの原因となる問題が解決できるように努力する」, 「今の経験は今後のためになると思うようにしている」, 「何か問題が生じたときには, 自分から行動を起こそうと思う」など 9 項目に関して 5 段階評定 (1: あてはまらない~5: あてはまる) させた。

パフォーマンス 合宿中におけるトレーニングにおいてのパフォーマンスに関する尺度。乗艇練習が行われていることを前提に, 「ドライブは軽かった」, 「バランスは良かった」, 「キャッチ, フィニッシュは合わせられた」など 5 項目に関して 5 段階評定 (1: あてはまらない~5: あてはまる) させた。

行動 合宿中のトレーニング時以外の日常行動を測定する尺度。「気づいたことを

相手に伝えた」, 「自発的にみんなのために行動した」, 「暴飲暴食をした」など, 11 項目に関して 5 段階評定 (1: あてはまらない~5: あてはまる) させた。

後悔 で測定した内容に則して, それぞれの行動に対しての後悔や, 合宿中における後悔を測定する尺度。「気づいたことを相手に伝えておけばよかったと思う」, 「自発的にみんなのために行動しておけばよかったと思う」, 「ボートをやめようと思った」など 16 項目に関して 5 段階評定 (1: あてはまらない~5: あてはまる) させた。

パーソナリティ パーソナリティは, 情緒不安定性, 外向性, 開放性, 調和性, 誠実性の 5 つを NEO - FFI 人格検査をもとに測定した。情緒不安定性は「くよくよしない+」, 「心配性」, 「悩みがち」など, 外向性は「話し好きな」, 「外向的な」, 「内気な+」など, 開放性は「多才な」, 「鈍感な+」, 「洞察力のある」など, 調和性は「短気な+」, 「温和な」, 「自己中心的な」など, 誠実性は「勤勉な」, 「計画性のある」, 「几帳面な」など, 計 5 因子 30 項目に関して 5 段階評定 (1: あてはまらない~5: あてはまる) させた。+ は反転項目。

結果と考察

合宿における各因子間の関係のパーソナリティによる差異

まず、合宿開始時点で測定したデータをもとに ストレス、コミュニケーション、モチベーション、パフォーマンス、行動、後悔の計6尺度についておのおの因子分析（一般化した最小二乗法、プロマックス回転）を行った。なお 情動、パーソナリティはそれぞれ先行研究に基づき因子を作成した。また 体調、対処行動は変数をそのまま使用した。

因子分析の結果を Table 1-6 に示す。

以上の結果をもとに、 から「人間関係」「管理不能」「プレッシャー」の3つのストレス因子、 から「トレーニング時」「合宿生活」の2つのコミュニケーション因子、 から「試合へのモチベーション」「自己成長」の2つのモチベーション因子、 から「協調」「乗艇の調子」の2つのパフォーマンス因子、 から「逃避行動」「貢献行動」の2つの行動因子、 から に対応した「逃避への後悔」「貢献行動せず後悔」の2つの後悔因子を作成し、それをもとに合宿開始時(7月)のデータと大会時(8月)のデータから合成変数を作成した。また、 から「ストレスの原因となる問題が解決出来るように努力する」を「行動的対処」、「今の経験は今後のためになると思うようにしている」を「合理化」、「自分の行動は正しかったと思うようにしている」を「正当性」、「何か問題が生じたときには、自分から行動を起こそうと思う」を「行動変更」とし、4つの対処行動因子を作成した。 は先行研究に基づき、「恐怖」「怒り」「悲しみ」「嫌悪」「喜び」

「緊張覚醒+」「緊張覚醒-」「エネルギー覚醒+」「エネルギー覚醒-」の9つの情動因子から合成変数を作成した。また不適切行動として、 の中の行動（「暴飲暴食をした」、「過度の夜更かしをした」、「自分の不満を、人に八つ当たりした」、「やらなければならないことがあるのに、全く何もしなかった」、「自分の非を認めず、かたくなに意地をはった」、「自分の行った行動や態度を後悔している」、「自分自身に対して失望している」、「他の人に対して失望している」、「ボートをやめようと思った」）を用いた。

パーソナリティの違いが、合宿の前後の変化に及ぼす影響を調べるために、これらの要因を従属変数として、2（各パーソナリティの高群と低群）×2（時間：合宿直前と合宿直後）の繰り返しのある分散分析を行った。なおパーソナリティに関しては、 の情緒不安定性、外向性、開放性、調和性、誠実性の各合計点が18を高群、18未満を低群とした。

パーソナリティ別の平均値を Table 7 に示す。長期合宿において一番影響を与えるパーソナリティが外向性で、有意であった項目が12個あった。次いで調和性と誠実性が4個、情緒不安定性と開放性が2個であった。ボートコースにおける合宿は、生活のリズムや、食事、一緒にいるメンバーも常に一定であることから、大きなストレスや不満を感じることもあるだろう。しかし今回の結果から、そのような状況下にあっても、外向性が高い人は人間関係においてストレスを感じること

が少なく済むことがわかる。また、対処行動の行動変更や行動的対処において有意差が認められたことから、積極的にストレスを発散することが出来ていると考えられる。外向性は合宿生活のコミュニケーションにおいても有意差が認められており、コミュニケーションはモチベーションやパフォーマンスとも正の相関関係があったことから、合宿の最大の目的である、ボート競技における技術及び体力の向上には必要な要素であると言えるだろう。調和性は不適切行動と3つの項目で有意差が認められた。調和性が高い人は低い人よりも集団から逸脱するような行動をとらないといえる。さらに管理不能ストレスとも有意差が認められた。これらの点から、調和性は合宿を円滑に行うために重要なパーソナリティといえる。

相関関係の変化

合宿前と合宿後の各要因間の関連性の違いを調べるために、上記で示した要因間の相関をしらべた。Figure 2-3 に合宿前と合宿後の関連図を示す。なお相関が有意であった関連性のみ図示している。

合宿以前と合宿後を比較して、合宿はパフォーマンスで多くの要因と相関が見られたのに対し、合宿後になると相関関係にある項目が減っている。これは、普段のトレーニングと違い、本番であるが故の雰囲気、環境や心情の変化が大きく影響していると考えられる。また、パフォーマンスは目に見えて変化がわかる項目故に、より相関のある項目が洗練さ

れたとも考えられる。ストレスからストレスの対処行動への相関では、合宿前は有意差が認められていなかったのだが、合宿後になって有意差が認められている。合宿を通じて反省などを繰り返すことにより、対処行動をとれるようになるのだろう。合宿を通じて、より環境に適した関連性に変化していく可能性が考えられる。

2.2 実験2

目的

実験1では、合宿の最初と合宿後(大会期間中)の2点だけで実験を行ったが、これでは合宿最中の変化の過程が不明である。実験2では、より詳しく検証するために毎日の変化を測定し、実際に各変数は合宿中にどのように変化しているのかを検証する。

方法

実験1にも参加してもらった埼玉県戸田市のボートコースで合宿を行うT大学の大学生を対象に、質問紙法を用いてボート競技における合宿生活の調査を行った。得られた有効回答数は17で、内訳が男性15名、2名であった。測定は、7月19日~8月12日の間において、朝トレーニングが行われた日の朝食後に行った。測定時に質問紙を随時配布し、全体の測定終了時に一斉回収した。なお、質問紙の質問項目は実験1の ~ までを使用し、実験1では最近1ヶ月について訊ねていたものを、実験2では今現在及び前日の状

態についてたずねた。

質問 ~ までは1期(7月19日),2期(7月28日),3期(8月3日),4期(8月10日,(11日)(註1)の4日間,前日のことについて質問している質問 ~ までは7月20日,7月29日,8月4日,8月11(12)日の4日間に測定したデータと,実験1で測定した問 パーソナリティの結果を用いて,合宿期間中に各変数がどのように変化しているかを検証するため,反復測定による一元配置の分散分析を行った。日付は,練習初日,途中参加部員の収集日,収集日と練習最終日の中間日,練習最終日である。問 パーソナリティのデータは,T大学の夏季長期合宿初日に測定した実験1の7月時点のものを使用し,実験1同様に各パーソナリティの値が18以上であるか,18未満であるかで分類した。尚,分類の結果,誠実性と調和性の分類が全く同一となったため,結果はまったく同じになった。

11,12日は選手によって練習した日程が違うため。

結果と考察

パーソナリティと時間の影響

パーソナリティと時間の交互作用で有意差が認められた項目は,開放性と調和性(誠実性)でそれぞれ2個ずつであった(Figure 4-5)。緊張覚醒+において,調和性(誠実性)が高い人は合宿開始時点より下降していくのに対し,調和性(誠実性)が低い人は合宿中に緊張が高まっている。また,管理不能ストレスにおいても,調和性(誠実性)が高い人は

下降しているのに対し,低い人は管理不能に陥りやすいといえる。調和性(誠実性)は,合宿中に自分の状況を把握し,物事を整理する際に大きく影響を及ぼす。合宿中に自分のペースを守り,落ち着いた生活を送るためには大切な要素の一つだと考える。

パーソナリティの主効果では,外向性において9個の項目で有意差が認められた。中でもストレスとコミュニケーションにおいて大きな差が見られた。対人関係において,外向性が高い人は合宿生活におけるコミュニケーションの得点が上昇し,人間関係のストレスは減少したのに対し,外向性が低い人は人間関係のストレスがなかなか改善されず,コミュニケーションも大きな上昇はなかった。怒りのような負の感情においても,外向性が高いと抑えられるのに対し,外向性が低い人は徐々に大きくなっていっている。特殊な合宿環境において外部への接触は,ストレスの解消や,円滑なコミュニケーションに大きな役割を果たしていると考えられる(Figure 6-10)。

時間の主効果は情緒不安定性で1個,自己成長に対するモチベーションにおいて認められた。合宿開始時点で情緒不安定性の低い人は自己成長変数の得点が低かったのだが,合宿最終日には,情緒不安定性の高低に関係なく高い得点を示した。これは時間を重ねることによって,合宿が何のために行われているかをお互いに認識でき,そのため自己成長への意欲が上昇し高い状態を維持することができたものと考えられる。

3. 総合考察

パーソナリティによる差異

実験1と実験2で示された結果から、特殊な合宿生活の環境において、円滑なコミュニケーションと人それぞれのパーソナリティが多くの内的要因や行動に影響を与えていることがわかった。その中でも外向性は、人間関係のストレスや感情といった人の内的要因に加え、貢献行動やコミュニケーションといった対人行動とも有意差が認められた。外向性が高い人ほど、合宿という特殊な環境においても良好な人間関係を築くことができる。また自分自身だけではなく、周りの人にも良い影響を与えられるといえるだろう。外向性の高い人ほど負の感情やストレスを感じないというのは、良好な対人関係を構築できるおかげだと考えられる。コミュニケーションは時系列的变化においても外向性と関係があり、時間の経過とともにコミュニケーションの得点は上昇している。マンネリ化してしまう合宿生活において、外向性は合宿生活をストレスの無い快適なものにするために重要であると思われる。さらに、コミュニケーションはパフォーマンスやモチベーションと相関関係があることから、合宿の効果をも高めるために外向性は重要であるといえるだろう。

次に相関が多く見られた調和性は、管理不能ストレスや、不適切行動に有意差が認められた。合宿中の時系列変化においては、緊張

覚醒において有意差が認められた。調和性が高い人は低い人よりも、管理不能ストレスをためにくく、不適切行動を起こさないことがわかった。調和性が高い人は自己管理能力が高いといえるだろう。合宿生活において、自分のすべきことができるということは、人に迷惑をかけないということも意味している。調和性は、集団生活において重要なパーソナリティだといえる。

誠実性や開放性、情緒不安定性はそれほど多くの有意差は認められなかった。誠実性は、合宿の前後において貢献行動と逃避行動に有意差を示した。誠実性は合宿中の行動に影響を与えている。誠実性が高い方が貢献行動をし、逃避行動をしないことがわかった。誠実性は内的要因よりも行動に直接的な影響を与えていると考える。

時間による差異

各項目の相関関係の変化で一番大きかったものは、大会以前と比較して大会時のパフォーマンスと相関関係にある項目の減少したことである。合宿によって、パフォーマンスはより独立したものとなり、コミュニケーションやモチベーション、対処行動といった項目とだけ相関があった。他の項目と違い、目に見えて変化していく項目だからこそ、関連している項目がより明確になったのだと考えられる。また、ストレス対処とストレスは、合宿開始時点では相関関係がなかったが、大会時に相関関係が認められている。これに加えて、不適切行動が合宿前後で減少してい

ることから考えても、合宿生活を体験することにより、ストレスを上手に対処できるようになり、不適切行動をしなくなることがわかる。つまり、合宿ではパフォーマンスだけではなく、人間としての成長も大きく期待できることがわかる。

パーソナリティが人の内的要因に大きな影響を与え、それが行動となってあらわれる。その行動を経験することにより、自分の中で学習されて再び次の行動につながると考えられる。

人の内的要因と行動は常に密接な関係があり、そこには全て感情が伴う。また、環境によって人の行動が変わることから、環境が一連の流れを作っているともいえる。パーソナリティと環境は、人の行動や感情のような内的要因に対して大きな影響を与えていると考えられる。

4．今後の課題

合宿環境においてパーソナリティが各要因に与える影響について多くの検証を行った。しかし、多くの人が活動している中で実際にどういうものを与えれば、外向性などのパーソナリティが高まり、より良い人間関係やパフォーマンスを出せるのか検証する必要があるだろう。問題の具体的な解決方法を探るような検証を、再び同じような条件下で行う必要がある。

また、外向性の高低がコミュニケーションやストレスに大きく影響を与えていること

がわかったが、外向性を高めるためにはどうしたらよいかを明らかにする必要がある。実際に人のパーソナリティを大きく変えることも可能なのか検証することが必要と考えられる。

特殊環境とはいえ、その環境に適してしまっただけの人と、まだ適応出来ていない人を区別する検定も必要だと思う。今回の実験では検証しなかったが、その環境に対するスタンスや、経験年数などによって、また違う要因の関係が生まれる可能性もある。

今回はパフォーマンスに関する質問項目を、個人の感覚に頼ってしまうものにしていく。タイムなどの具体的で客観的なデータを加え、実際のパフォーマンス向上がどう起こっているかを検討していく必要があるだろう。

4．参考文献

- Alling A, Nelson M, Silverstone S & Thillo MT (2002) : Human factor observations of the BIOSPHERE 2, 1991-1993, closed life support to a long-term manned mission to mars. *Life Support & Biosphere Science*, 8; 71-82,
- Cohen, S., Kamarck, T., & Mermelstein, R. (1983) A global measure of perceived stress. *Journal of Health and Social Behavior*, 24, 385-396.
- Cutrona, C.E., Hessling, R.M., & Suhr, J.A. (1997) The influence of husband and wife

- personality on marital social support interactions. *Personal Relationships*, 7, 553-562.
- Eysenck, h. j. (1970) *The structure of human personality*. London: Methuen.
- Eysenck, h. j. (1991) *Dimensions of personality: The biological approach to personality*. In J. Streau & A. Angleiter (Eds.), *Explorations in temperament: International perspectives on theory and measurement*. London: Plenum.
- Kahn PM, Leon GR: Group climate and individual functioning in an all-women Antarctic expedition team. *Human Performance in Extreme Environments*, 5; 35-43, 2000.
- 橋本剛 (1999) 大学新入生における対人ストレス-経時的变化およびパーソナリティの観点から- 日本心理学会第 63 回大会発表論文集, 999.
- 橋本剛 (2005) ストレスと対人関係 ナカニシヤ出版 61, 191.
- 宮下彰夫 (1994) 睡眠調査(生活習慣調査) 日本睡眠学会編 睡眠学ハンドブック 朝倉書店 533-538.
- 宗像恒次・仲尾唯治・藤田和夫・諏訪茂樹 (1986) 都市住民のストレスと精神健康度 精神衛生研究, 32, 47-68.
- 村上正人・桂戴作 (1988) ストレスの早期発見, その対策と治療法 ストレス・チェックリストによる調査 ストレスと人間科学, 3, 9-12.
- NEO-FFI 人格検査 東京心理株式会社
- 織田弥生・高野ルリ子 (1996) 情動と覚醒を評価するための質問紙の作成 日本心理学会第 60 回大会発表論文集, 908.
- 小栗貢・白川修一郎・阿住一雄 (1985) OSA 睡眠調査票の開発 睡眠感評定のための統計的尺度構成と標準化 精神医学, 27, 791-799.
- 尾関友佳子・原口雅浩・津田彰 (1994) 大学生の心理的ストレス過程の共分散構造分析 健康心理学研究, 7, 20-36.
- 高野謙二 (1998) 長期閉鎖空間での集団生活 が心身に及ぼす影響に関する精神医学的研究 科学研究費補助金研究成果報告書
- 辻平治郎 (1998) 5 因子性格検査の理論と実際 北大路書房, 3, 64, 195.
- 辻平治郎・藤島寛・辻斉・夏野良司・向山泰代・山田尚子・森田義宏・秦一士 (1997) パーソナリティの特性論と 5 因子モデル: 特性の概念, 構造, および測定 心理学評論, 40, 239-259
- 上市秀雄 2003 個人的リスク志向・回避行動における個人差を規定する要因の分析 風間書房
- 上市秀雄・楠見孝 1998a パーソナリティ・認知・状況要因がリスクテイキング行動に及ぼす効果, 心理学研究, 69(2), 81 - 88 .
- 上市秀雄・楠見孝 1998b 損失状況におけるリスク行動の個人差を規定する要因: 共分散構造分析法による検討, 日本リスク研究学会誌, 10(1), 65 - 72 .

- 上市秀雄・楠見孝 2000 後悔がリスク志向・回避行動における意思決定に及ぼす影響：感情・パーソナリティ・認知要因のプロセスモデル, 認知科学, 7(2), 139-151.
- 上市秀雄・楠見孝 2004 後悔の時間的变化と対処方法：意思決定スタイルと行動選択との関連性, 心理学研究, 74(6), 487 - 495.
- 上市秀雄・楠見孝 2006 環境ホルモンのリスク認知と回避行動, 認知科学, 13, 32-46.
- 和田さゆり・池田栄子 (1995) 進路適正検査における有能感尺度の作成()-Big Fiveとの関連-. 日本心理学会第 37 回総会発表論文集, 65.

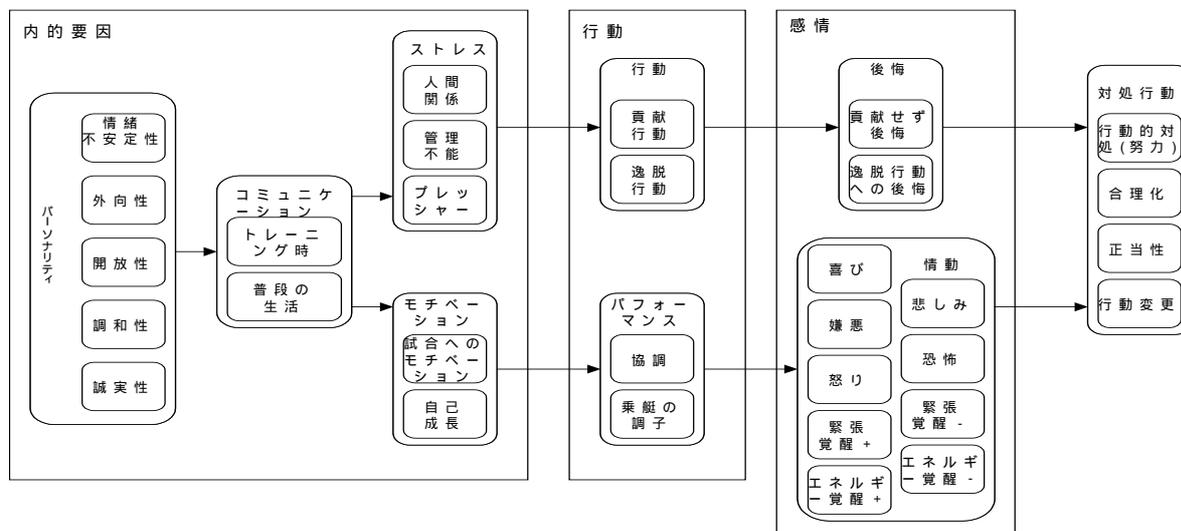


Figure 1 本研究で仮定した要因全体の関連性

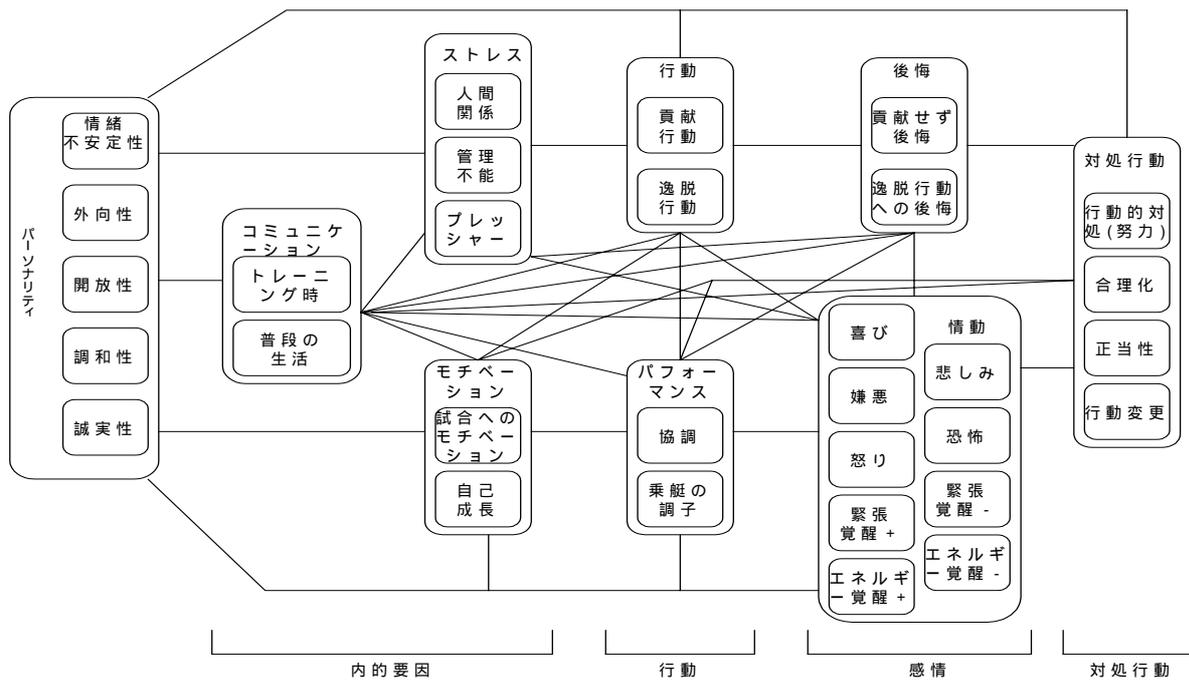


Figure 2 合宿開始時点の相関関係

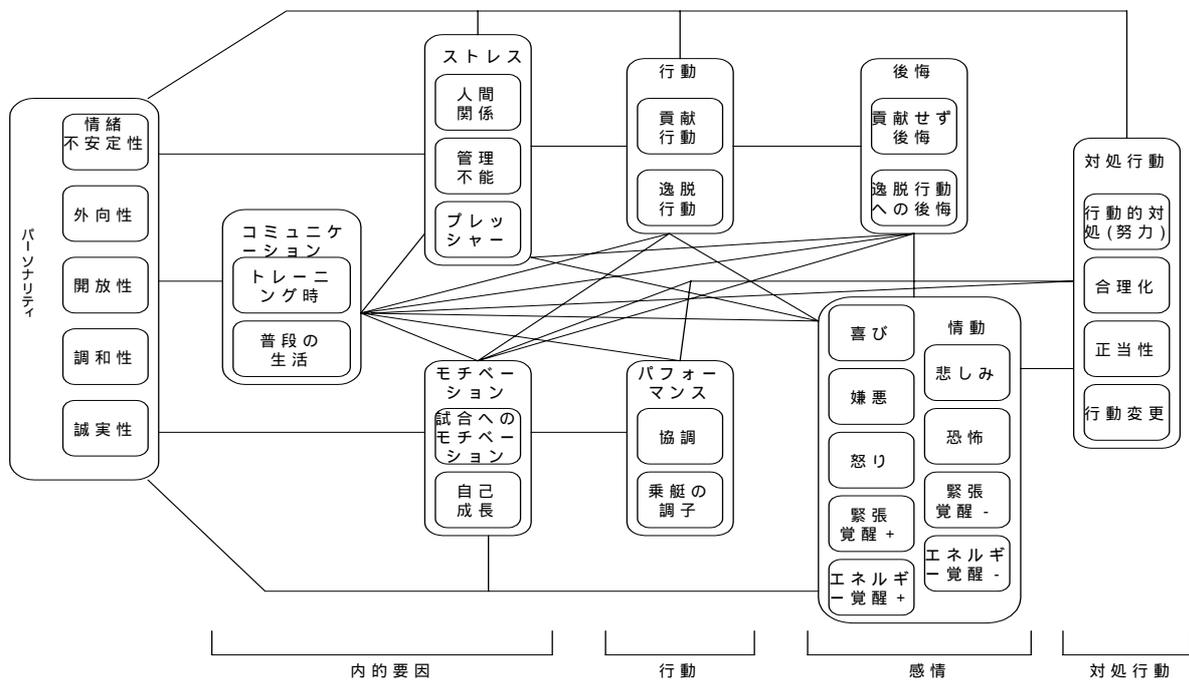


Figure 3 合宿から約1ヵ月後(大会時)の相関関係

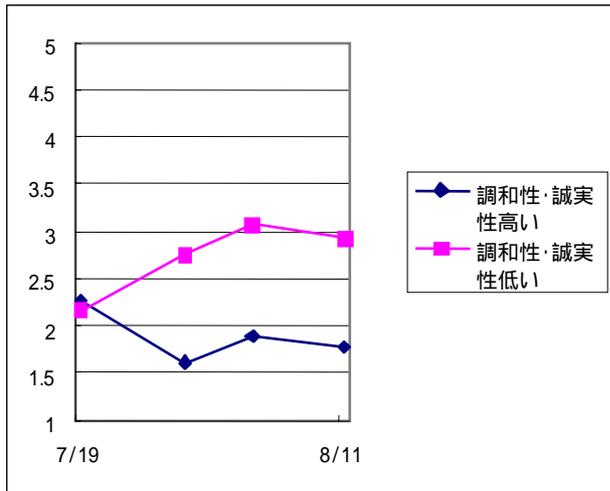


Figure 4 緊張覚醒+の時系列的変化

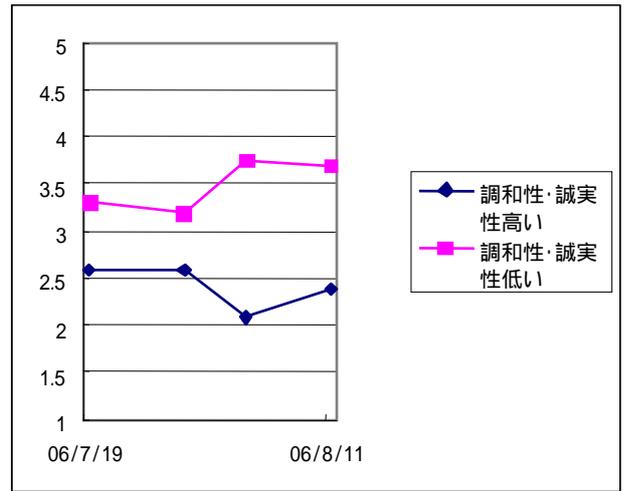


Figure 5 管理不能の時系列的変化

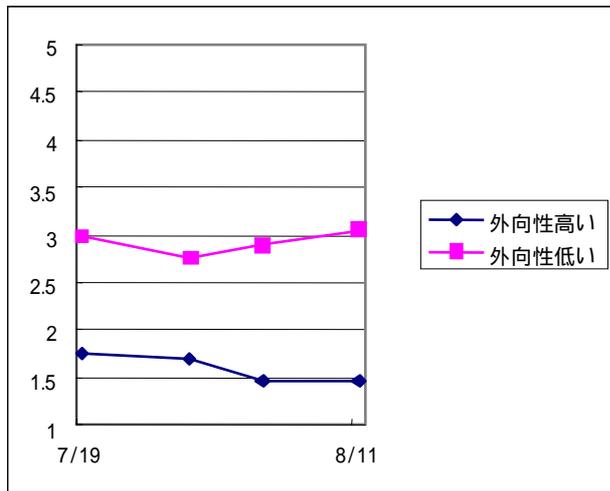


Figure 6 人間関係の時系列的変化

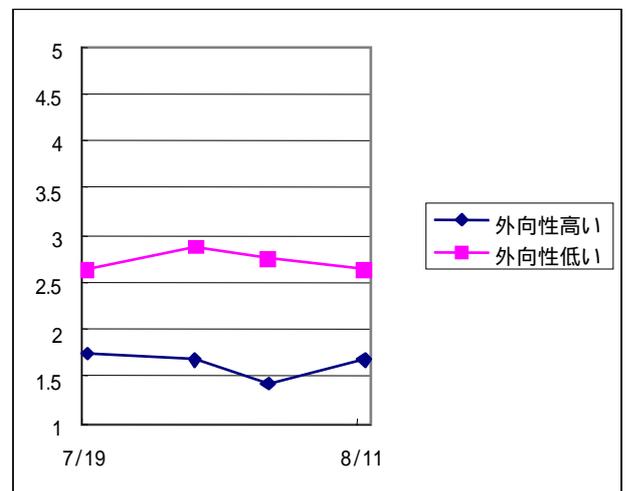


Figure 7 プレッシャーの時系列的変化

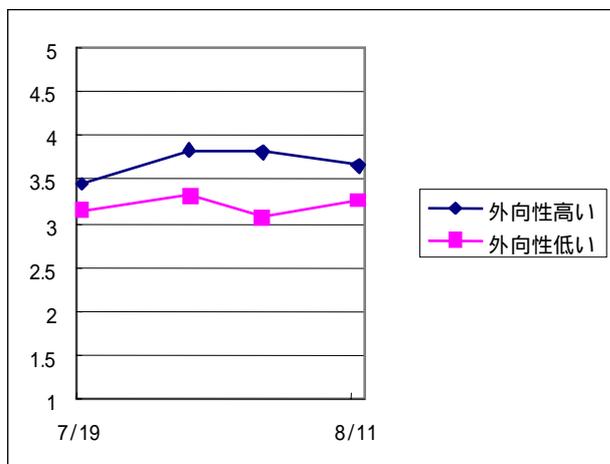


Figure 8 トレーニング時の
コミュニケーション時系列的変化

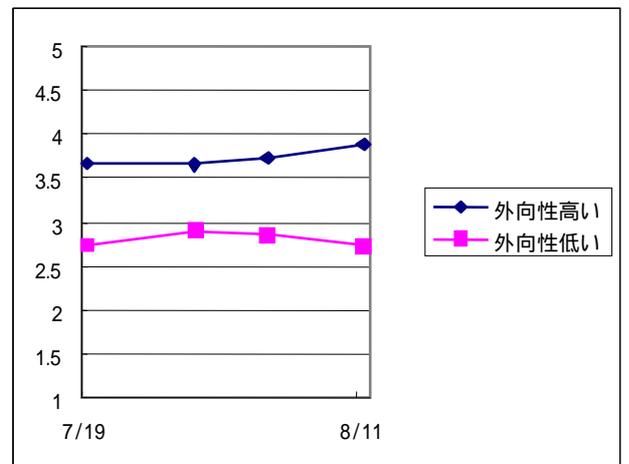


Figure 9 合宿時生活時の
コミュニケーションの時系列的変化

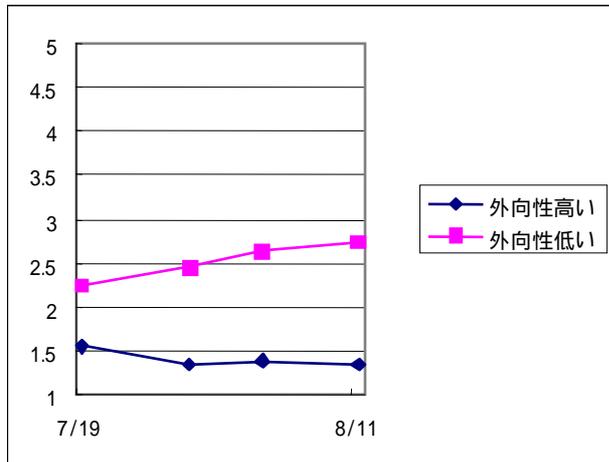


Figure 10 怒りの時系列的变化

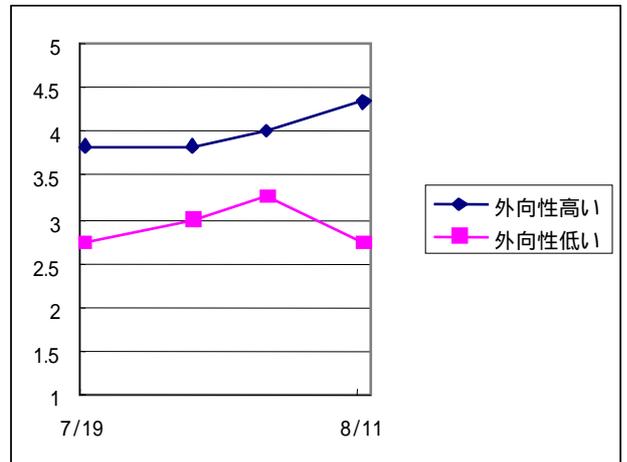


Figure 11 行動的対処の時系列的变化

Table 1 ストレスの因子負荷量行列

	人間関係	管理不能	プレッシャー	共通性
人と話すのが面倒に感じる	.975	-.046	-.126	.942
一人になりたいと感じる	.738	.008	.048	.571
打ち解けていない人がある	.659	-.108	.149	.526
人からの注意が気にさわる	.483	.339	-.002	.477
やらなければいけないことが多すぎる	-.205	.771	.000	.561
時間を有効に使えていない	.066	.466	.114	.385
自分の思い通りに物事が進まない	.173	.442	-.082	.262
他人に気を使わない人に憤りを感じる	.048	.247	.155	.163
周囲の期待にプレッシャーを感じる	-.009	.006	.998	.999
人の目を気にしている	.248	.083	.304	.251
累積寄与率%	13.5	37.2	47.3	

因子相関行列

因子	人間関係	管理不能	プレッシャー
人間関係	1.000	.274	.024
管理不能	.274	1.000	.329
プレッシャー	.024	.329	1.000

Table 2 コミュニケーション尺度項目の因子負荷量行列

	トレーニング時	合宿生活	共通性
なんでもみんなで言い合うことが出来る	.889	.133	.916
チームワークがとれている	.732	-.008	.787
自分の意見を言いにくい時がある†	.598	-.016	.661
ミーティングでのフィードバックを お互いに行えている	.514	-.129	.557
気づいたことをその場で伝えるようにしている	.310	.219	.641
人の話をきちんと聞いて受け入れられる	-.139	1.036	.999
人の気持ちを考えて会話をしている	.092	.563	.615
自分の本音を言うことが出来ない†	.040	.461	.595
メンバーのアドバイス(声かけ)にきちんと 返事ができている	.063	.371	.395
話し掛けられても、話があまり続かない†	.054	.274	.317
自分から積極的に話し掛けている	-.022	.176	.352
話していることがうまく相手に 伝わらないことがある†	.027	.134	.542
累積寄与率%	16.9	34.0	

†は反転項目

因子相関行列

因子	トレーニング時	合宿生活
トレーニング時	1.000	.324
合宿生活	.324	1.000

Table 3 モチベーション尺度項目の因子負荷量行列

	試合へのモチベーション	自己成長	共通性
試合に向けての良いイメージを持っている	.814	-.155	.656
乗艇前に課題を持ち、			
乗艇中にその課題に取り組んでいる	.762	.130	.753
大会に向けての明確な目標がある	.693	.203	.717
他の人よりも上手になりたい	.474	.374	.480
人に勝つことより、			
自分なりに一生懸命やるのが大事だ†	.420	-.206	.168
努力するのは人に負けないためだ	.403	.000	.525
難しいことでも努力して出来るようにしたい	-.211	1.111	.999
自分で立てた目標は必ず達成したいと思う	.062	.510	.480
他人と競争して勝つと嬉しい	-.007	.453	.548
累積寄与率%	26.6	47.7	

†は反転項目

因子相関行列

因子	試合へのモチベーション	自己成長
試合へのモチベーション	1.000	.596
自己成長	.596	1.000

Table 4 パフォーマンス尺度項目の因子負荷量行列

	協調	乗艇の調子	共通性
キャッチ、フィニッシュは合わせられた	.981	-.047	.932
ボディワークを合わせられた	.648	.094	.480
バランスはよかった	-.115	.791	.574
強いドライブを続けられた	.121	.618	.454
ドライブは軽かった	.096	.487	.286
累積寄与率%	32.7	54.2	

因子相関行列

因子	協調	乗艇の調子
協調	1.000	.357
乗艇の調子	.357	1.000

Table 6 後悔の因子負荷量行列

	逃避への後悔	貢献行動せず後悔	共通性
過度の夜更かしをしなければよかったと思う	1.017	-.230	.976
暴飲暴食をしなければよかったと思う	.773	.050	.741
自分の不満を 人に八つ当たりしなければよかったと思う	.585	.069	.696
自分の非を認め、 意地を張らなければよかったと思う	.499	.296	.854
やらなければならぬことを、 きちんとしておけばよかったと思う	.374	.328	.561
気づいたことを 相手に伝えておけばよかったと思う	.021	.994	.999
もっといろいろな人に自分からコミュニケーションを とっておけばよかったと思う	-.110	.647	.624
全体のために何をするのがベストか 考えればよかったと思う	.083	.492	.829
できるかぎり練習に打ち込んでおけば よかったと思う	-.034	.478	.578
自発的にみんなのために 行動しておけばよかったと思う	.146	.251	.814
累積寄与率%	24.4	46.7	

因子相関行列

因子	逃避への後悔	貢献行動せず後悔
逃避への後悔	1.000	.250
貢献行動せず後悔	.250	1.000

Table 7 パーソナリティ別の各要因の平均得点 (SD)

項目	情緒不安定性				有意差
	高い		低い		
	前	後	前	後	
情動					
恐怖	2.28(.15)	2.22(.16)	1.82(.18)	2.00(.23)	n.s.
怒り	2.82(.20)	2.48(.21)	2.17(.24)	2.14(.30)	情緒不安定性*
悲しみ	2.50(.17)	2.40(.18)	2.13(.21)	2.11(.26)	n.s.
嫌悪	2.50(.98)	2.30(.98)	2.15(.88)	2.07(.87)	n.s.
喜び	3.07(.43)	3.35(.61)	2.99(.54)	3.50(.56)	時間**
緊張覚醒+	3.05(.77)	2.90(.92)	2.69(1.01)	2.51(.95)	n.s.
緊張覚醒-	3.10(.81)	3.23(.83)	3.19(.91)	3.33(.49)	n.s.
エネルギー覚醒+	3.28(.59)	3.19(.65)	3.37(.78)	3.32(.49)	n.s.
エネルギー覚醒-	2.55(1.09)	2.17(.81)	2.02(.87)	2.12(.91)	n.s.
ストレス					
人間関係	2.94(.93)	2.63(1.01)	2.62(1.15)	2.34(.96)	n.s.
管理不能	3.47(.90)	3.36(.89)	3.45(.56)	2.86(.98)	n.s.
プレッシャー	3.00(.81)	2.66(.90)	2.24(.90)	2.18(.98)	情緒不安定性**
コミュニケーション					
トレーニング時	3.12(.64)	3.26(.64)	3.27(.53)	3.42(.40)	n.s.
合宿生活	3.08(.54)	3.32(.67)	3.33(.45)	3.29(.55)	n.s.
モチベーション					
試合へのモチベーション	3.63(.70)	3.70(.57)	3.69(.78)	3.62(.50)	n.s.
自己成長	4.41(.63)	4.41(.49)	4.39(.45)	4.36(.66)	n.s.
対処行動					
行動的対処	3.19(.94)	3.32(.99)	3.29(1.26)	3.55(.52)	n.s.
合理化	3.81(1.17)	3.41(.96)	3.71(1.21)	3.91(.70)	n.s.
正当性	3.15(.88)	2.68(1.17)	2.88(1.22)	3.18(1.17)	n.s.
行動変更	3.12(1.14)	3.27(1.03)	3.53(.94)	3.45(.82)	n.s.
パフォーマンス					
協調	2.83(.81)	2.75(.78)	3.02(.76)	3.00(.84)	n.s.
乗艇の調子	2.82(.80)	2.77(.48)	3.00(.83)	2.70(.77)	n.s.
行動					
逃避行動	2.61(1.11)	1.90(.71)	2.02(.90)	2.00(.85)	n.s.
貢献行動	3.50(.63)	3.50(.75)	3.32(.53)	3.35(.68)	n.s.
後悔					
逃避への後悔	2.57(.85)	2.04(.77)	2.29(1.09)	1.91(.80)	時間*
貢献行動せず後悔	3.02(.89)	2.62(.92)	2.84(.95)	2.85(.67)	n.s.
不適切行動					
暴飲暴食をした	2.58(1.39)	1.57(1.03)	2.00(1.41)	2.00(1.55)	n.s.
過度の夜更かしをした	2.73(1.64)	1.67(1.11)	2.12(1.36)	1.82(1.08)	時間*
自分の不満を					
人に八つ当たりした	2.27(1.34)	1.95(1.02)	1.76(.90)	2.00(1.26)	n.s.
やらなければならないことがあるのに					
全く何もしなかった	3.00(1.36)	2.33(1.06)	2.41(1.28)	2.09(.94)	n.s.
自分の非を認めず、					
かたくなに意地を張った	2.46(1.21)	1.95(.97)	1.82(1.01)	2.09(.1.04)	n.s.
自分の行った行動や態度を					
後悔している	2.61(.82)	2.67(1.11)	2.70(.92)	2.19(.75)	n.s.

自分自身に対して					
失望している	2.73(1.15)	2.31(1.13)	2.06(1.25)	1.91(.83)	n.s.
他の人に対して					
失望している	2.46(1.17)	1.91(.97)	2.12(1.27)	2.18(.98)	n.s.
ボートをやめようと思った	1.92(1.13)	1.77(.97)	1.59(1.00)	1.54(1.04)	n.s.

項目	外向性				有意差
	高い		低い		
	前	後	前	後	
情動					
恐怖	1.87(.66)	2.01(.86)	2.01(.86)	2.34(.60)	外向性**
怒り	2.44(.95)	2.13(.98)	2.84(1.06)	2.73(1.09)	外向性*
悲しみ	2.82(.79)	2.09(.77)	2.82(.84)	2.63(.85)	外向性**
嫌悪	2.09(.82)	1.99(.97)	2.92(.94)	2.58(.78)	外向性**
喜び	3.06(.46)	3.43(.54)	2.93(.44)	3.34(.67)	時間**
緊張覚醒+	2.64(.85)	2.56(.98)	3.40(.71)	3.05(.80)	外向性**
緊張覚醒-	3.17(.87)	3.25(.80)	3.00(.78)	3.28(.62)	n.s.
エネルギー覚醒+	3.43(.56)	3.25(.61)	3.07(.78)	3.21(.61)	n.s.
エネルギー覚醒-	2.07(.84)	1.98(.85)	2.87(1.19)	2.41(.77)	外向性**
ストレス					
人間関係	2.55(.99)	2.30(1.02)	3.37(.88)	2.88(.85)	外向性**
管理不能	3.57(.82)	3.06(.80)	3.31(.70)	3.40(1.11)	n.s.
プレッシャー	2.61(.96)	2.38(.93)	2.77(.82)	2.69(.95)	n.s.
コミュニケーション					
トレーニング時	3.21(.63)	3.46(.55)	3.15(.57)	3.06(.52)	n.s.
合宿生活	3.31(.49)	3.49(.61)	2.90(.49)	3.04(.56)	外向性*
モチベーション					
試合へのモチベーション	3.68(.67)	3.78(.49)	3.59(.85)	3.51(.60)	n.s.
自己成長	4.43(.59)	4.37(.51)	4.36(.53)	4.44(.61)	n.s.
対処行動					
行動的対処	3.41(.97)	3.70(.73)	2.80(1.08)	2.92(.86)	外向性**
合理化	3.70(1.20)	3.70(.86)	3.80(1.15)	3.38(.96)	n.s.
正当性	2.96(.98)	2.60(1.05)	3.07(1.03)	3.23(1.30)	n.s.
行動変更	3.44(1.01)	3.70(.86)	2.87(1.06)	2.77(.83)	外向性**
パフォーマンス					
協調	2.93(.67)	2.85(.59)	2.87(1.03)	2.81(.97)	n.s.
乗艇の調子	2.81(.84)	2.75(.52)	2.93(.70)	2.74(.70)	n.s.
行動					
逃避行動	2.36(.92)	1.95(.84)	2.47(1.33)	1.91(.65)	時間*
貢献行動	3.54(.66)	3.68(.60)	3.17(.35)	3.09(.76)	外向性**
後悔					
逃避への後悔	2.56(.96)	1.95(.79)	2.37(.90)	2.06(.77)	外向性*
貢献行動せず後悔	2.98(.94)	2.63(.91)	3.01(.75)	2.80(.74)	n.s.
不適切行動					
暴飲暴食をした	2.52(1.34)	1.74(1.19)	2.13(1.55)	1.69(1.32)	n.s.
過度の夜更かしをした	2.52(1.45)	1.89(1.20)	2.53(1.77)	1.46(.88)	時間*
自分の不満を					
人に八つ当たりした	2.04(1.16)	1.89(.99)	2.20(1.32)	2.08(1.26)	n.s.
やらなければならないことがあるのに					

全く何もしなかった	2.52(1.31)	2.11(.99)	3.13(1.36)	2.46(1.05)	n.s.
自分の非を認めず、 かたくなに意地を張った	2.19(1.08)	2.11(.99)	2.33(1.35)	1.85(.99)	n.s.
自分の行った行動や態度を 後悔している	2.67(.92)	2.37(1.12)	2.73(.70)	2.69(.85)	n.s.
自分自身に対して 失望している	2.30(1.20)	2.25(1.07)	2.87(1.19)	2.08(1.04)	n.s.
他の人に対して 失望している	2.07(1.14)	2.00(.97)	2.87(1.19)	2.00(1.00)	n.s.
ボートをやめようと思った	1.59(.93)	1.80(1.11)	2.20(1.26)	1.54(.78)	n.s.

項目	開放性				有意差
	高い		低い		
	前	後	前	後	
情動					
恐怖	1.98(.66)	2.25(.83)	2.25(.82)	2.07(.75)	n.s.
怒り	2.60(1.12)	2.41(.92)	2.55(.89)	2.33(1.15)	n.s.
悲しみ	2.31(.84)	2.27(.74)	2.44(.90)	2.33(.91)	n.s.
嫌悪	2.24(.85)	2.34(.95)	2.54(1.03)	2.13(.94)	n.s.
喜び	3.05(.47)	3.57(.58)	2.98(.43)	3.28(.57)	時間**
緊張覚醒+	2.67(.90)	3.16(.79)	3.02(.97)	2.60(.88)	交互作用*
緊張覚醒-	3.08(.81)	3.36(.63)	3.14(.91)	3.19(.80)	n.s.
エネルギー覚醒+	3.35(.53)	3.45(.51)	3.25(.78)	3.08(.62)	n.s.
エネルギー覚醒-	2.22(1.05)	2.14(.87)	2.49(1.04)	2.16(.83)	n.s.
ストレス					
人間関係	2.62(1.12)	2.61(1.03)	3.06(.89)	2.47(.98)	n.s.
管理不能	3.48(.92)	3.20(.87)	3.48(.64)	3.20(1.01)	n.s.
プレッシャー	2.71(.92)	2.68(.95)	2.62(.92)	2.37(.93)	n.s.
コミュニケーション					
トレーニング時	3.31(.63)	3.36(.62)	3.06(.56)	3.26(.54)	n.s.
合宿生活	3.22(.57)	3.46(.74)	3.10(.46)	3.20(.51)	n.s.
モチベーション					
試合へのモチベーション	3.77(.64)	3.74(.60)	3.53(.81)	3.63(.51)	n.s.
自己成長	4.40(.65)	4.31(.56)	4.41(.48)	4.46(.54)	n.s.
対処行動					
行動的対処	3.48(.93)	3.57(.76)	2.90(1.09)	3.26(.93)	n.s.
合理化	3.76(1.04)	3.79(.89)	3.71(1.31)	3.42(.90)	n.s.
正当性	2.76(.77)	3.07(1.21)	3.24(1.14)	2.68(1.16)	n.s.
行動変更	3.57(1.16)	3.50(.94)	2.90(.83)	3.21(.98)	開放性*
パフォーマンス					
協調	2.81(.81)	2.96(.75)	3.00(.79)	2.74(.84)	n.s.
乗艇の調子	2.90(.74)	2.83(.41)	2.81(.85)	2.68(.69)	n.s.
行動					
逃避行動	2.52(1.15)	2.04(.70)	2.27(.99)	1.84(.80)	時間*
貢献行動	3.50(.55)	3.59(.85)	3.31(.63)	3.33(.60)	n.s.
後悔					
逃避への後悔	2.48(.86)	2.10(.74)	2.51(1.02)	1.91(.80)	時間*
貢献行動せず後悔	2.76(.99)	2.74(.82)	3.22(.67)	2.67(.88)	n.s.

不適切行動						
暴飲暴食をした	2.52(1.44)	1.79(1.12)	2.24(1.41)	1.67(1.33)	時間*	
過度の夜更かしをした	2.90(1.61)	1.93(1.33)	2.14(1.42)	1.56(.86)	時間*	
自分の不満を 人に八つ当たりした	2.24(1.34)	1.93(.83)	1.95(1.07)	2.00(1.28)	n.s.	
やらなければならないことがあるのに 全く何もしなかった	2.71(1.45)	2.29(1.14)	2.76(1.26)	2.22(.94)	n.s.	
自分の非を認めず、 かたくなに意地を張った	2.24(1.14)	2.29(.99)	2.24(1.22)	1.78(.94)	n.s.	
自分の行った行動や態度を 後悔している	2.67(.86)	2.43(1.16)	2.71(.85)	2.56(.92)	n.s.	
自分自身に対して 失望している	2.52(1.25)	2.29(1.20)	2.48(1.21)	2.11(.94)	n.s.	
他の人に対して 失望している	2.33(1.20)	2.00(1.04)	2.38(1.24)	2.00(.94)	n.s.	
ボートをやめようと思った	1.71(1.12)	1.57(.85)	1.90(1.10)	1.79(1.08)	n.s.	

項目	調和性				有意差
	高い		低い		
	前	後	前	後	
情動					
恐怖	2.01(.78)	2.10(.81)	2.29(.66)	2.25(.73)	n.s.
怒り	2.40(.88)	2.35(1.08)	3.00(1.16)	2.38(1.02)	n.s.
悲しみ	2.31(.80)	2.28(.85)	2.46(1.04)	2.35(.82)	n.s.
嫌悪	2.31(.98)	2.18(.92)	2.50(.89)	2.30(1.01)	n.s.
喜び	3.10(.45)	3.47(.67)	2.88(.52)	3.25(.29)	時間**
緊張覚醒+	2.83(.90)	2.71(.96)	3.11(.82)	2.93(.89)	n.s.
緊張覚醒-	3.25(.81)	3.29(.83)	2.86(.55)	3.20(.42)	n.s.
エネルギー覚醒+	3.39(.65)	3.22(.66)	3.13(.68)	3.28(.45)	n.s.
エネルギー覚醒-	2.38(.94)	2.10(.91)	2.25(1.28)	2.27(.66)	n.s.
ストレス					
人間関係	2.64(1.01)	2.42(.97)	3.27(.94)	2.78(1.02)	n.s.
管理不能	3.34(.82)	3.03(.94)	3.78(.54)	3.58(.84)	調和性*
プレッシャー	2.61(.91)	2.63(.99)	2.91(.95)	2.20(.75)	n.s.
コミュニケーション					
トレーニング時	3.12(.62)	3.26(.61)	3.33(.54)	3.40(.47)	n.s.
合宿生活	3.20(.49)	3.39(.59)	3.09(.60)	3.13(.68)	n.s.
モチベーション					
試合へのモチベーション	3.68(.59)	3.70(.57)	3.58(1.03)	3.63(.50)	n.s.
自己成長	4.39(.61)	4.36(.56)	4.44(.41)	4.47(.53)	n.s.
対処行動					
行動的対処	3.26(1.09)	3.52(.67)	3.17(1.03)	3.10(1.20)	n.s.
合理化	3.81(1.08)	3.61(.89)	3.67(1.44)	3.50(.97)	n.s.
正当性	3.09(1.08)	2.87(1.14)	2.92(.90)	2.80(1.32)	n.s.
行動変更	3.29(1.07)	3.35(.93)	3.25(1.14)	3.30(1.06)	n.s.
パフォーマンス					
協調	3.02(.77)	2.85(.87)	2.63(.80)	2.80(.63)	n.s.
乗艇の調子	2.95(.74)	2.75(.63)	2.75(1.00)	2.73(.49)	n.s.
行動					
逃避行動	2.34(.98)	1.75(.66)	2.47(1.30)	2.40(.81)	n.s.

貢献行動	3.44(.62)	3.48(.64)	3.40(.53)	3.36(.94)	n.s.
後悔					
逃避への後悔	2.40(.98)	1.89(.80)	2.62(.88)	2.27(.64)	n.s.
貢献行動せず後悔	2.96(.93)	2.70(.89)	2.90(.88)	2.69(.75)	n.s.
不適切行動					
暴飲暴食をした	2.42(1.43)	1.70(1.18)	2.17(1.40)	1.78(1.39)	n.s.
過度の夜更かしをした	2.42(1.52)	1.52(.95)	2.67(1.67)	2.22(1.30)	n.s.
自分の不満を					
人に八つ当たりした	2.00(1.18)	1.70(.93)	2.25(1.29)	2.67(1.22)	調和性*
やらなければならぬことがあるのに					
全く何もしなかった	2.87(1.26)	1.96(.82)	2.50(1.57)	3.00(1.12)	交互作用*
自分の非を認めず、					
かたくなに意地を張った	2.00(1.10)	1.87(.97)	2.75(1.22)	2.33(1.00)	調和性*
自分の行った行動や態度を					
後悔している	2.55(.93)	2.39(.99)	2.92(.67)	2.78(1.09)	n.s.
自分自身に対して					
失望している	2.39(1.20)	2.09(1.00)	2.67(1.30)	2.40(1.17)	n.s.
他の人に対して					
失望している	2.26(1.21)	2.00(.90)	2.50(1.24)	2.00(1.15)	n.s.
ボートをやめようと思った	1.65(.98)	1.65(.88)	2.17(1.27)	1.80(1.23)	n.s.

項目	誠実性				有意差
	高い		低い		
	前	後	前	後	
情動					
恐怖	2.05(.53)	2.16(.85)	2.13(.92)	2.13(.72)	n.s.
怒り	2.61(1.02)	2.44(1.20)	2.52(.98)	2.28(.89)	n.s.
悲しみ	2.27(.81)	2.37(.89)	2.43(.92)	2.23(.79)	n.s.
嫌悪	2.35(.92)	2.29(.95)	2.38(1.00)	2.14(.94)	n.s.
喜び	2.92(.46)	3.49(.72)	3.15(.47)	3.31(.41)	時間**
緊張覚醒+	2.75(.79)	2.76(1.00)	3.08(.94)	2.79(.89)	n.s.
緊張覚醒-	3.16(.83)	3.45(.72)	3.12(.88)	3.06(.71)	n.s.
エネルギー覚醒+	3.40(.62)	3.29(.58)	3.23(.70)	3.17(.63)	n.s.
エネルギー覚醒-	2.06(.92)	2.06(.87)	2.61(1.09)	2.25(.81)	n.s.
ストレス					
人間関係	3.07(1.02)	2.38(.90)	2.57(.99)	2.69(1.07)	n.s.
管理不能	3.43(.66)	3.04(.91)	3.50(.89)	3.36(.97)	n.s.
プレッシャー	2.74(.89)	2.74(1.02)	2.66(.97)	2.25(.80)	n.s.
コミュニケーション					
トレーニング時	3.19(.71)	3.25(.66)	3.17(.48)	3.36(.46)	n.s.
合宿生活	3.27(.55)	3.53(.60)	3.07(.48)	3.08(.57)	誠実性*
モチベーション					
試合へのモチベーション	3.70(.70)	3.81(.57)	3.60(.76)	3.53(.48)	n.s.
自己成長	4.40(.55)	4.53(.44)	4.41(.57)	4.25(.62)	n.s.

対処行動						
行動的対処	3.19(1.03)	3.47(.71)	3.27(1.12)	3.31(1.01)	n.s.	
合理化	3.86(1.20)	3.88(.93)	3.68(1.17)	3.25(.77)	n.s.	
正当性	3.19(.93)	3.00(1.17)	2.91(1.11)	2.69(1.20)	n.s.	
行動変更	3.29(1.01)	3.41(.87)	3.27(1.16)	3.25(1.06)	n.s.	
パフォーマンス						
協調	2.81(.98)	2.94(.98)	3.00(.56)	2.72(.55)	n.s.	
乗艇の調子	2.94(.91)	2.73(.69)	2.85(.72)	2.77(.47)	n.s.	
行動						
逃避行動	2.05(.90)	1.78(.66)	2.69(1.13)	2.11(.84)	誠実性*	時間*
貢献行動	3.45(.63)	3.71(.56)	3.41(.58)	3.15(.78)	誠実性*	
後悔						
逃避への後悔	2.35(.85)	1.88(.78)	2.56(1.05)	2.12(.76)	時間*	
貢献行動せず後悔	2.87(.87)	2.61(.96)	3.01(.96)	2.80(.71)	n.s.	
不適切行動						
暴飲暴食をした	1.81(1.08)	1.71(1.31)	2.86(1.52)	1.73(1.16)	時間*	
過度の夜更かしをした	2.14(1.35)	1.71(1.10)	2.82(1.68)	1.73(1.10)	時間*	
自分の不満を						
人に八つ当たりした	1.90(1.14)	1.65(.79)	2.23(1.27)	2.33(1.29)	n.s.	
やらなければならないことがあるのに						
全く何もしなかった	2.38(1.12)	1.88(.78)	3.14(1.46)	2.67(1.11)	誠実性**	
自分の非を認めず、						
かたくなに意地を張った	2.00(1.00)	1.94(1.03)	2.41(1.30)	2.07(.96)	n.s.	
自分の行った行動や態度を						
後悔している	2.62(.86)	2.41(1.00)	2.68(.89)	2.60(1.06)	n.s.	
自分自身に対して						
失望している	2.38(1.16)	2.00(1.12)	2.55(1.30)	2.38(.96)	n.s.	
他の人に対して						
失望している	2.24(1.09)	1.88(.99)	2.41(1.33)	2.13(.96)	n.s.	
ボートをやめようと思った	1.81(1.03)	1.59(.80)	1.77(1.15)	1.81(1.17)	n.s.	

註 対処行動と不適切行動は単独変数。他の項目は因子分析に基づいた合成変数で、
全て5段階評価。

* $p < .05$, ** $p < 0.1$, *** $p < 0.01$

4.3 情報提示とパーソナリティがタバコに対する意識に及ぼす影響

研究代表者 上市秀雄 筑波大学大学院システム情報工学研究科講師

研究協力者 山本 匡 筑波大学社会工学類

研究要旨

本研究の目的は、生活リスク行動である喫煙行動に焦点を当て、タバコの情報提示（恐怖喚起 - 非喚起）と個人差（意思決定スタイル：熟慮して決める - 直観的に決める）が、喫煙意識に及ぼす影響について検討した。調査参加者は大学生 162 名（男性 101 名：内喫煙者 34 名，非喫煙者 67 名，女性 61 名：喫煙者 4 名，非喫煙者 57 名）であった。その結果、恐怖を喚起する情報を提示すると、タバコに対してネガティブな考えを持つようになったり、あるいはタバコをやめようとする傾向が高いことがわかった。ただし直観的な意思決定スタイルの人は、恐怖を喚起する情報を提示されると、タバコの害に対するリスクを低く見積もるようになることもわかった。これらの結果から、恐怖喚起する情報は喫煙行動をやめさせるために有効であると考えられるが、個人差を考慮した上で情報を提示しないと、逆効果になる可能性があることも示唆された。

1. 研究目的

日本での喫煙率は、JT が 2005 年 6 月に実施した「全国たばこ喫煙者率調査」によると、男性の喫煙率は 2001 年の 52.0% から 2005 年の 45.8% へ徐々に徐々に減少しているが、女性の喫煙率は 14% 程度でほぼ横ばい状態である。また厚生省による平成 10 年度「喫煙と健康問題に関する実態調査」によると、20 代男性の喫煙率は 1965 年は 80% 以上であったが、徐々に下がり、1998 年は 63% 程度にまで下がっているのは確かであるが、しかしながら 20 代の喫煙率は全体の喫煙率（54%）よりも高い。また 20 代女性の喫煙率は、1965

年は 10% 未満であったにもかかわらず、1998 年には 20% を越えている（20 代の女性の喫煙率も女性全体の喫煙率よりも高い）。このように 20 代の喫煙率は高いものといえる。また喫煙者人口は 3,400 万人弱と推計されるが、喫煙者のうち「やめたい」と考えている人は 26.7%、「本数を減らしたい」と考えている人は 37.5% で、合計 64.2% もおり、過半数の人は現在の自分の喫煙行動を何とかして改善したいと考えていることがわかる。

現在の喫煙方法を改善するための一つの方法として、情報提示が考えられる。公官庁の広報や CM、情報番組などで、喫煙の危険性を提示することはもちろん必要である。それ

だけでなく実際のタバコのパッケージにどのような情報を提示するかも重要なことと考えられる。なぜなら禁煙しようと考えていたとしても、ついタバコを手にしてしまうことがある。そのとき最初に目にする情報がパッケージである。そのパッケージに喫煙行動を抑制するための情報を提示しておけば、喫煙を思いとどまる可能性がある。また未成年者が興味本位でタバコを手にしたとき、そこにタバコの危険性を示す情報を提示しておけば、喫煙行動を思いとどまる可能性もある。それだけでなく、タバコに対するネガティブな情報に接していれば、喫煙行動に対してネガティブな印象が形成され、喫煙行動を抑止することができるかもしれない。

相手の行動を説得する方法として恐怖喚起コミュニケーションがある。Leventhal, Singer, and Jones (1965) は破傷風ワクチンの重要性を知らせるためには、強い脅しをかけた方が弱い脅しをかけたよりも、有効であることを示している。しかしこの恐怖喚起コミュニケーションでは、脅しが強すぎる場合にはかえって逆効果になることがある (Janis & Feshbach, 1953)。本研究では、社会問題化しており、健康を害する逸脱行動と考えられるタバコ行動を取り上げる。そして恐怖を喚起しない情報 (現在日本で使用されているタバコパッケージ) と恐怖を喚起する情報 (海外で使用されている恐怖を喚起するタバコパッケージ) を提示することによって、大学生のタバコに対する意識や喫煙行動がどのように変化するのかについて検討す

る。

2. 方法

調査参加者

大学生 162 名であった。参加者の内訳は、男性 101 名 (喫煙者 34 名, 非喫煙者 67 名), 女性 61 名 (喫煙者 4 名, 非喫煙者 57 名) であった。質問冊子を 2003 年 12 月に配布回収した。

質問項目

下記の項目によって測定した。尺度は 5 段階尺度 (1:あてはまらない~5:あてはまる) を用いた。

(a) 個人差要因

意思決定スタイル 自分行動を決めるときに、どの程度考えて決めるかを測定する尺度 (e.g., Janis & Mann, 1977; 上市・楠見, 2004; 上市・楠見, 2006)。“様々なことを考慮して、自分の行動を決める”, “その時の自分の気持ちに従って、自分の行動を決める*”, “今後の将来のことまで考えた上で、自分の行動を決める”の3項目によって測定した。

(b) 認知要因

リスク認知 タバコに対してどの程度リスクがあるかについての考え方を測定する尺度。“一本くらいのタバコならば人体に影響はないと思う”, “タバコを吸うことは健康を損なうと思う”, “タバコをビタミン C を欠乏させると思う”, “喫煙行動は数年後

に人体に影響すると思う”など5項目によって測定した。

コスト認知 “タバコの害を減らすためなら税金が増えてもよいと思う”によって測定した。

ベネフィット認知 “タバコはストレスを緩和してくれる”, “タバコは手軽な嗜好品だ”などの項目によって測定した。

損害の大きさ タバコによってどの程度人体や環境に悪い影響が起こるかについての考え方を測定する尺度。“タバコで汚れた肺は二度と戻らないと思う”, “タバコは人類にとって驚異である”の2項目によって測定した。

コントロールビリティ タバコの害や喫煙行動を自分でコントロールできるかどうかを測定する尺度。“タバコはやめようと思えばいつでもやめられる”によって測定した。

モラル タバコに関係する道徳観について測定する尺度。“タバコの吸い殻が道に落ちていたら不快に思う”, “歩きタバコの人を見ると不快に思う”, “タバコの自動販売機は未成年者への悪影響が懸念されるので撤廃すべきだと思う”などの項目によって測定した。

意識 タバコに対する各個人の不安感や意識を測定する尺度。“タバコに含まれる有害物質が自分の健康を損なうのではないかと不安に思う”, “ニコチンには依存性があると思う”などの4項目によって測定した。

行政への要望 “タバコの有害性への注意は十分していると思う”, “日本政府はより

厳しいタバコ規制に取り組むべきだと思う”, “タバコが人体に及ぼす確率や具体的な例を公表して欲しい”などの項目によって測定した。

喫煙に対するイメージ “タバコには悪いイメージがある”という項目を, 喫煙者に対してのみ測定した。

パッケージに対するショック “パッケージに対してショックを感じた”という項目を, 喫煙者に対してのみ測定した。

行動変更 “タバコをやめた方がよいと思う”という項目を, 喫煙者に対してのみ測定した。

(c) 情報提示

タバコに対する情報提示に関しては, 恐怖を喚起する情報(恐怖喚起情報)として, カナダで発売されているタバコのパッケージおよび注意書きを使用した(Figure 1)。また恐怖を喚起しない情報(恐怖非喚起情報)については日本のパッケージを用いた(Figure 2)。ただし写真はモノクロ写真を用いた。

実験手順

実験手順をFigure 3に示す。最初に(a)個人差要因, (b)認知要因を測定する。そして恐怖喚起群はFigure 1, 恐怖非喚起群はFigure 2の写真および情報を提示する。そしてこれらの写真および情報を見た後で, もう一度(b)認知要因を測定した。上記手続きによって, 恐怖喚起の程度による認知要因の変化を測定した。なお(b)認知要因のうち,

パッケージに対するショックと行動変更に関しては、情報提示後のみ測定している。

3. 結果と考察

意思決定スタイルの下位項目の合計が 10 以上を分析型, 9 以下直観型に分類した。そして意思決定スタイルおよび情報提示によって、タバコに対する認識が、情報提示前と後とでどのように変化するかについて検討するために、2 (意思決定スタイル: 分析型 - 直観型) × 2 (情報提示: 恐怖喚起情報 - 恐怖非喚起情報) × 2 × (喫煙の有無: 喫煙者 - 非喫煙者) の繰り返し (時間: 提示前 - 提示後) のある分散分析をおこなった。以下で、時間の影響が認められた要因についてのみ言及する。

リスク認知に関して、“一本くらのタバコならば人体に影響はない”については、意思決定スタイル、情報提示、時間による交互作用 ($F(1,154)=5.828$ $p=.017$) が有意であった (Figure 4)。これは、分析的な人に恐怖を喚起する提示すると、タバコは一本でも吸うと人体に影響すると考える傾向が情報提示後に高くなることを意味している。“タバコはビタミンCを欠乏させる”については、意思決定スタイル、情報提示、時間による交互作用 ($F(1,154)=5.790$ $p=.017$) が有意であった。これは直観的な人に恐怖を喚起しない情報を提示すると、タバコの害を低く考える傾向が高くなることを意味している。“タバコを吸うことは健康を損なう”については、

意思決定スタイル、情報提示、時間による交互作用 ($F(1,154)=4.115$ $p=.044$) が有意であった。これは、直観的な人に恐怖を喚起する情報を提示すると、タバコを吸うことは健康を損なうという考えが低くなることを意味している。

行政への要望に関して、“タバコが人体に及ぼす確率や具体例を公表して欲しい”について、意思決定スタイル、情報提示、時間の交互作用が認められた ($F(1,154)=5.006$ $p=.027$)。これは、直観的な人に恐怖を喚起しない情報を提示すると、タバコが人間に及ぼす悪影響についての情報を求める傾向が高くなることを意味している (Figure 5)。

コスト認知に関して、“タバコの害を減らすためなら税金が増えてもよい”について、喫煙の有無と時間の交互作用が有意であった ($F(1,154)=7.973$ $p=.005$)。これは喫煙者は、恐怖喚起する情報、恐怖を喚起しない情報に関わらず、タバコに関するネガティブな情報を提示されると、税金を負担してもよいと考える傾向が高くなることを意味している (Figure 6)。

ベネフィット認知に関して、タバコはストレスを緩和してくれる”について、喫煙の有無、意思決定スタイル、情報提示、時間の交互作用が認められた ($F(1,154)=7.538$ $p=.007$)。これは、分析型の喫煙者の人に、恐怖を喚起する情報を提示すると、タバコはストレス解消に必要だと考える傾向が低くなることを意味している (Figure 7)。

次に喫煙者のみを分析した。タバコに関す

るイメージについて、2（意思決定スタイル：分析型 - 直観型）× 2（情報提示：恐怖喚起情報 - 恐怖非喚起情報）の繰り返し（時間：提示前 - 提示後）のある分散分析をおこなった。その結果、意思決定スタイルと時間の交互作用が有意であった（ $F(1,34)=5.562$ $p=.024$ ）。これは、分析型の方は、恐怖喚起 - 非喚起に関わらず、タバコに害があるというネガティブ情報を提示されると、タバコに対して悪いイメージを持つようになることを意味している（Figure 8）。

パッケージによるショックに関しては、2（意思決定スタイル：分析型 - 直観型）× 2（情報提示：恐怖喚起情報 - 恐怖非喚起情報）の分散分析をおこなった（Figure 9）。その結果、恐怖を喚起する情報ほどショックが大きいことが示された（ $F(1,34)=6.968$ $p=.012$ ）。

行動変更に関しては、2（意思決定スタイル：分析型 - 直観型）× 2（情報提示：恐怖喚起情報 - 恐怖非喚起情報）の分散分析をおこなった（Figure 10）。その結果、意思決定スタイルにかかわらず、恐怖を喚起する情報ほど、“タバコをやめよう”と思う傾向が高くなることが示された（ $F(1,34)=4.113$ $p=.050$ ）。

情報提示および意思決定スタイルの影響

恐怖を喚起する情報を提示した場合と、あまり恐怖を喚起しない情報を提示した場合とでは、恐怖を喚起した情報を提示した方が、タバコに対する認識がネガティブな考えを

持つようになったり、あるいはタバコの害に対する意識が高くなる傾向があることがわかった。たとえば、“タバコはストレス解消に必要ない”、“多少税金が高くなってもよい”、“タバコの害を公表すべき”などのような考えが強くなることがわかった。また喫煙者に関しては、恐怖喚起した方が“タバコをやめよう”という意識も高い。これは Leventhal, et al (1965) が示唆したことと一致するものであった。

しかし恐怖を喚起する情報提示が逆効果になる場合も示された。リスク認知（タバコに対する害の認識）に関しては、恐怖を喚起する情報を分析型の方に提示すると、タバコは危険だという認識が高くなるのに対し、直観型の方はタバコは危険ではないという認識になることが示されている（Figure 4の“一本くらいなら影響しない”と“タバコは健康を損なう”の図を参照）。これは Janis & Feshbach (1953) が示した結果を支持するものである。このような結果になった原因の一つとして、不協和を解消するメカニズムが働いたものと考えられる（e.g., Ditto, Jemott, & Darley, 1988）。直観的な人は、客観的な情報を取り入れて判断するよりもむしろ自分の感じたまま行動する傾向が高いと考えられる。そのため感じた恐怖が大きいとその被害が自分に起こる可能性を低く評価することによって、心のバランスをとろうとするのかもしれない。

本研究の結果は、情報を受取りそしてそれによってどのように認識が変化するかには

個人差が大きく影響していることを示している。つまり人の意思決定をするときに熟慮するかあるいは直観的に考えて行動するかを決める傾向性の違いによって、情報の受け入れ方が異なることを示唆するものと考えられる。

4.まとめ

本研究の結果より、恐怖を喚起する情報を提示すると、タバコに対してネガティブな考えを持つようになったり、あるいはタバコをやめようとする傾向が高いことがわかった。ただし直観的な意思決定スタイルの人は、恐怖を喚起する情報を提示されると、タバコの害に対するリスクを低く見積もるようになることもわかった。これらの結果から、恐怖喚起する情報は喫煙行動をやめさせるために有効と考えられるが、個人差を考慮した上で情報を提示する必要があることがわかった。

本研究の質問紙で提示したタバコパッケージは恐怖喚起を大小に分類したものであった。本研究で使用したカナダと日本のタバコパッケージだけでなく、恐怖喚起の程度をより細分化したパッケージを使用して比較検討する必要がある。本研究においては、恐怖を喚起する媒体としてタバコパッケージを用いたが、テレビCMやラジオ広告などように異なる媒体による恐怖喚起をした場合の広告とパーソナリティがタバコに対する意識に及ぼす影響を検討する必要があるだ

ろう。

5.参考文献

- Ditto, P. H., Jemmott, J. B. III, & Darley, J. M. (1988). Appraising the threat of illness: A mental representational approach. *Health Psychology, 7*, 183-200.
- Janis, I. L., & Feshbach, S. 1953 Effects of fear-arousing communications. *Journal of Abnormal and Social Psychology, 48*, 78-92.
- Janis, I., & Mann, L. 1977 *Decision making: a psychological analysis of conflict, choice, and commitment*, New York, NY: Free Press.
- JT 2005 「全国たばこ喫煙者率調査」
<http://www.jti.co.jp/News/05/NR20051018/20051018.html>
- 厚生省 1998 平成10年度 喫煙と健康問題に関する実態調査
http://www1.mhlw.go.jp/houdou/1111/h1111-2_11.html#no1
- Leventhal, H., Singer, R. P., & Jones, S. 1965 The effects of fear and specificity of recommendation upon attitudes and behavior. *Journal of Personality and Social Psychology, 2*, 20-29.
- 上市秀雄・楠見孝 2004 後悔の時間的变化と対処方法：意思決定スタイルと行動選択

との関連性,心理学研究,74(6),487 - 495 .
上市秀雄・楠見孝 2006 環境ホルモンのリ

スク認知と回避行動,認知科学,13,32-46.

以下の写真をよくご覧下さい。

・次の写真は、カナダで販売されているタバコのパッケージです。



写真は損傷を受けた心臓の動脈が詰まっている様子

パッケージには、こう書かれています。

警告

タバコは心臓を破壊します。
喫煙行為は心臓の動脈を詰まらせることとなります。
心臓の動脈が詰まると心臓発作が引き起こされ、
あなたを死に至らせる可能性があります。

Figure 1 恐怖喚起情報提示群の写真および情報

以下の写真をよくご覧下さい。

- ・次の写真は、日本国内で販売されているタバコのパッケージです。
写真はパッケージの展開図



上の写真の側面には、
以下のように書かれています。
・あなたの健康を損なうおそれがありますので
吸いすぎに注意しましょう
・喫煙マナーをまもりましょう

Figure 2 恐怖非喚起情報提示群の写真および情報

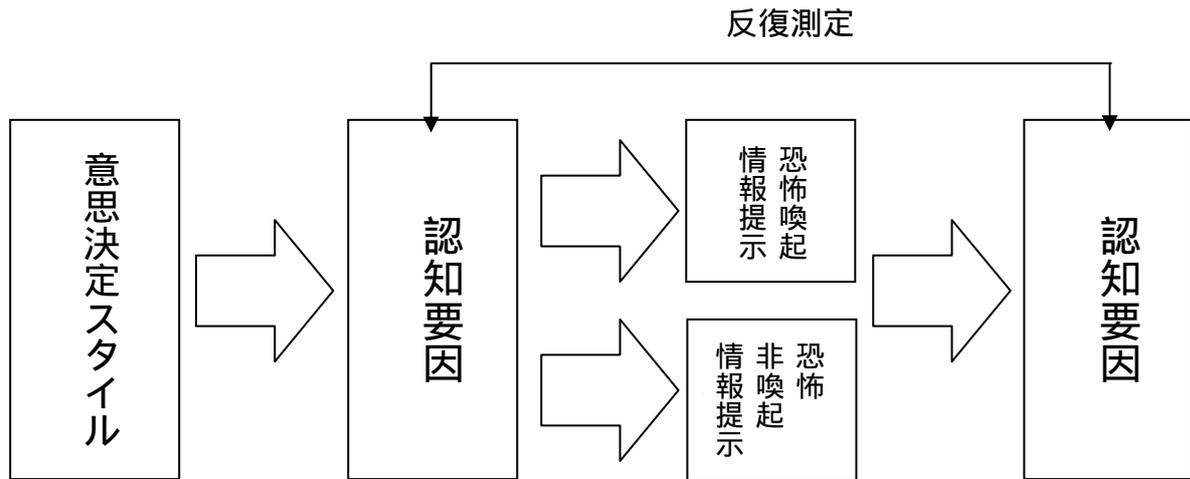


Figure 3 実験の手順

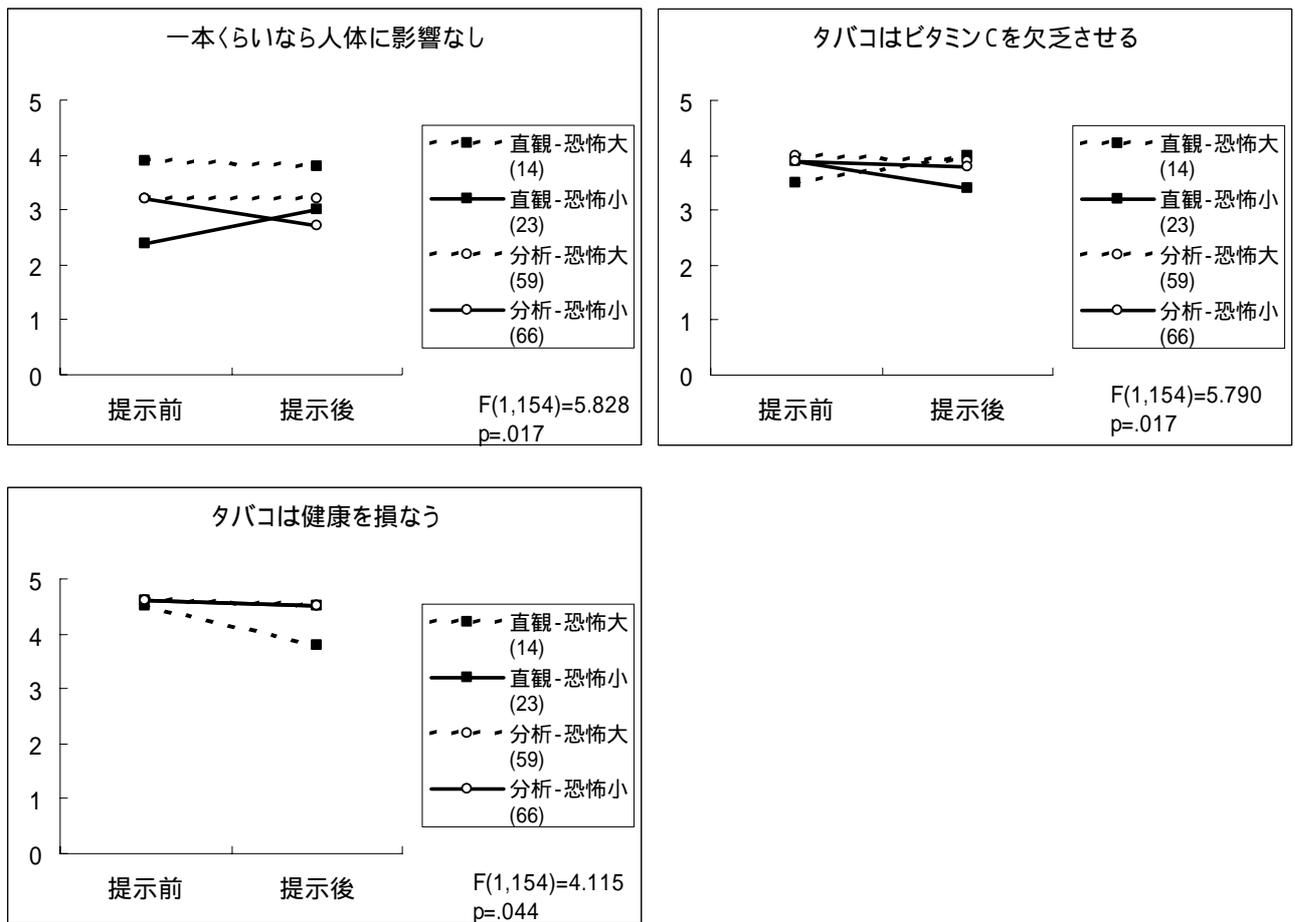


Figure 4 意思決定スタイル，情報提示によるリスク認知の変化

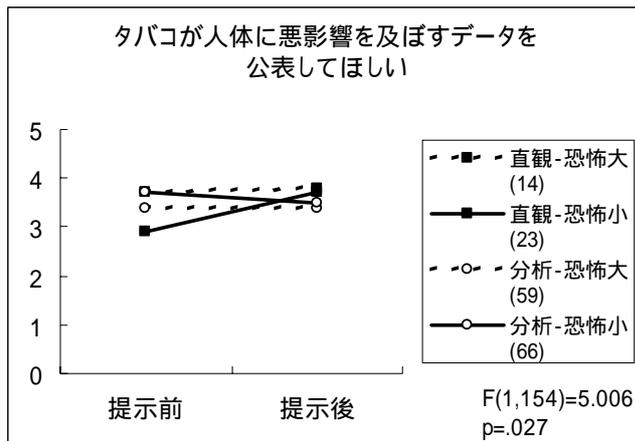


Figure 5 意思決定スタイル，情報提示による行政への要望の変化

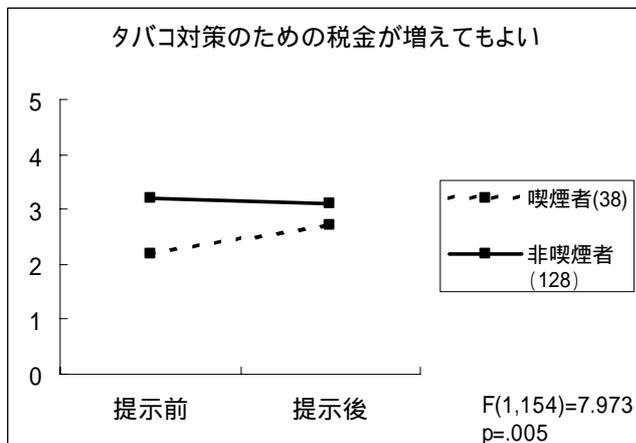


Figure 6 意思決定スタイル，情報提示によるコスト認知の変化

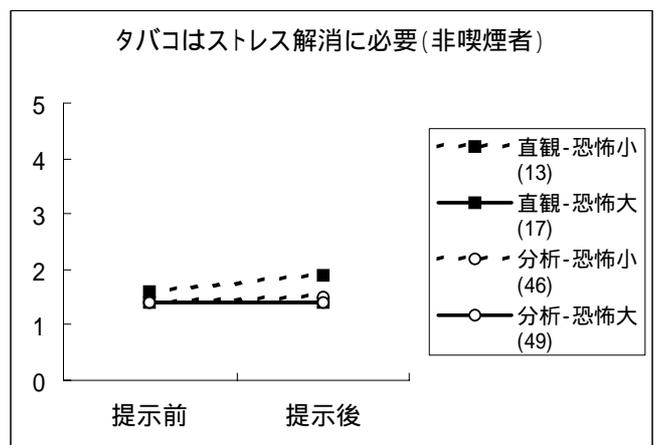
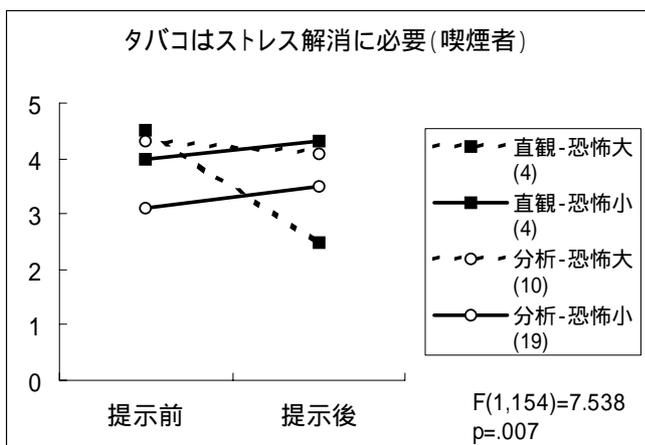


Figure 7 意思決定スタイル，情報提示によるベネフィット認知の変化 (喫煙-非喫煙別)

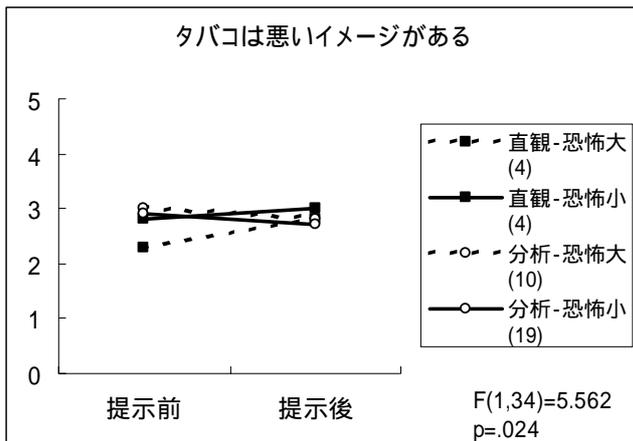


Figure 8 意思決定スタイル, 情報提示によるベネフィット認知の変化 (喫煙のみ)

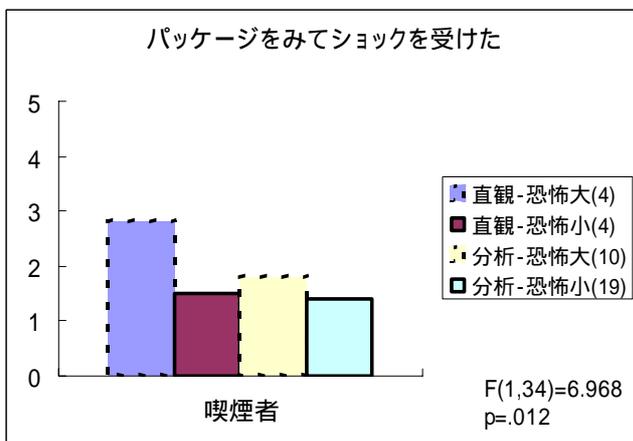


Figure 9 意思決定スタイル, 情報提示によるショックの程度 (喫煙のみ)

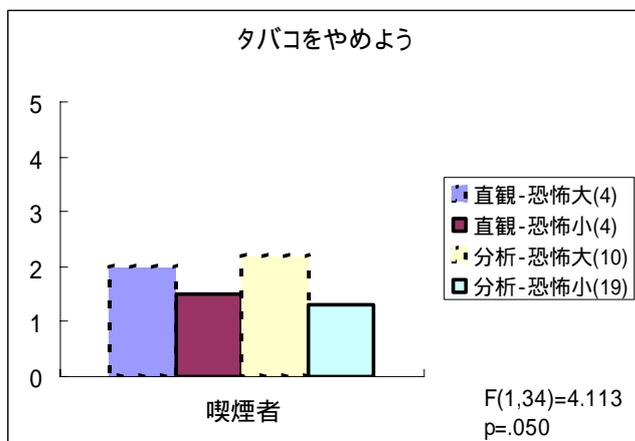


Figure 10 意思決定スタイル, 情報提示による行動変更の程度 (喫煙のみ)

4.4 規範意識と情報提示が消費者行動に及ぼす影響

- 音楽用 CD の違法コピーに関する検討 -

研究代表者 上市秀雄 筑波大学大学院システム情報工学研究科講師

研究協力者 木佐木隆志 筑波大学社会学類

研究要旨

本研究の目的は、CCCD に関するさまざまな情報を提示することによって消費者の CCCD に対する認識あるいは違法コピーに対する認識の変化にどのような影響を及ぼすことができるのかを検討した。質問紙調査を、大学生 133 人(男性 105 人,女性 28 人)に対しておこなった。その結果、(a) 遵法意識の高い人に CCCD に関するポジティブな情報を提示すると、CCCD の必要性を認識させることができる、(b) 道徳観の高い人に CCCD に関するポジティブな情報を提示すると、CCCD を出すレコード会社に好感を抱かせることができ、かつ CCCD の価格意識まで変化させることができる、(c) 道徳観の低い人に CCCD に関するポジティブでない情報を提示すると、CCCD の購入に対して後悔をさせることになる、(d) CCCD 導入による CD の売り上げに関する情報は、ポジティブ・ネガティブに関係なくマナー意識の低い人には良い印象を与えない、ということが明らかとなった。

1. 研究目的

近年の音楽産業縮小の大きな要因のひとつとして「違法コピー」が挙げられている。これは個人的に楽しむ目的以外による CD のコピーのことで、著作権違反である。現在インターネット上では Winny や WinMX といった違法なファイル共有ソフトが蔓延しており、違法コピーの拡大に拍車をかけている。

このように社会問題となりつつある違法コピーに対し、その予防策として各レコード会社が導入したのがコピーコントロール CD (Copy Control CD。以下 CCCD) と呼ばれる

新しい CD である。CCCD とは違法コピーを未然に防ぐために作られた CD のことで、ハードディスクに取り込むことができないように細工がなされている。

しかしながら CCCD には多くの問題点が存在する。第一に CCCD は CD を再生する全てのメディアでの再生を保証していない。たとえばパソコンやポータブル CD プレーヤーなどの再生メディアでは、再生に不都合が生じる可能性があることが明記されている。また最悪のケースとして CCCD 再生による再生メディアの故障の可能性も指摘されている。第二にこれらの再生メディアで CCCD を再生できな

った場合、あるいは CCCD を再生したことによって再生メディアに故障などの不具合をきたした場合、レコード会社からの保証がないという点である。たとえばある消費者が CCCD を購入し、それを当該消費者の所有するパソコンで再生した結果そのパソコンになんらかの不具合が生じたとしても、それは当該消費者の責任ということになる。

これらの CCCD の問題点を把握した上で、それでも著作権を守るために必要不可欠として CCCD を購入するのなら問題はないが、実際はこれらの CCCD の問題点は消費者のもとには十分に届いていない。消費者は CCCD の問題点を知らずに、あるいは CCCD という存在そのものを知らずに購入してしまっているケースがほとんどである。

CCCD には様々な問題点が存在しているにもかかわらず、このような商品が流通するきっかけとなったのは、著作権を侵害し、レコード会社やアーティストなどの利益を侵害する、違法コピーの横行である。上記に示したように、違法コピーが拡大する背景にはインターネット上のファイル共有ソフトの蔓延が大きな要因のひとつとされている。これらのファイル共有ソフトを利用するなどして違法コピーをするか、あるいは著作権を守るために CD あるいは CCCD を購入するかは、個人の規範意識と密接に関わる問題である。

人の意思決定には情報が大きな影響を及ぼしていることが知られている。例えば、リスク状況下の意思決定においては、各個人が持っている知識や情報量が、ベネフィット認

知を介して、行動選択に影響を及ぼしている（e.g., 上市・楠見, 1998a; 1998b; 2000; 2006）。また前述のような違法行動も、私たちが受け取る情報に影響をうけると考えられる。田中（2004）は、広告媒体を用いて、ポジティブ感情を喚起する、情報はネガティブな感情を喚起する情報よりも、情報の精緻化（広告から発せられる説得メッセージが十分に吟味される）することを明らかにしている。また後悔という感情が人の意思決定に大きな影響を与えている（上市・楠見, 2004）。このことは、情報の内容によっては、不適切な行動を適切な行動へ変化させる可能性を示唆するものと考えられる。

そこで本研究では題材として CCCD をとりあげ、CCCD に関するさまざまな情報を提示することによって、消費者の CCCD に対する認識あるいは違法コピーに対する認識の変化にどのような影響を及ぼすことができるのかを明らかにする。

2. 方法

実験参加者 大学生 133 人（男性 105 人、女性 28 人）。

手続き 質問冊子は 7 ページからなる。2004 年 11 月に質問紙を配布回収した。

質問項目

規範意識 個人の規範意識を測定する尺度を新たに作成し、5 段階評定（1：当てはまらない～5：当てはまる）で測定した。個人の規範意識は、遵法（“どんな理由であれ

法を犯すことは許されない”、“車や人通りが少なくても信号無視はしない”、“少しぐらいの違法行為はみんなしているから、構わない*”)、道徳(“秘密は必ず守る”、“借りたものは必ずかえす”、“困っている人を助けるのはめんどろだ*”)、マナー(“敬語を使うのはわずらわしいので使いたくない*”、“上下関係は守らなければならない”、“自分の考えとあわなければ習慣は無視してよい*”)の3要素から成ると仮定し、『心理尺度ファイル』(堀・山本・松井, 1994)を参考にして質問項目を作成した(Table 1参照)。*は反転項目。

音楽に対する態度 被験者が音楽にどの程度関わっているか、5段階(1:当てはまらない~5:当てはまる)で測定した。項目は、音楽を聴く頻度(“ラジオの音楽番組をよく聴く”、“テレビの音楽番組をよくみる”、“コンサートやライブによく行く”、“普段から楽器を演奏する”など)、音楽を好む程度(“音楽が趣味である”、“音楽無しの生活は考えられない”など)、知識(“いろいろな音楽のジャンルを知っている”、“幅広く音楽を聴いている”など)からなる。

音楽を聴くメディア どのようなメディアを利用して音楽を聴いているかに関する質問項目。“CDプレイヤーで聴いている”、“パソコンで聴いている”、“iPodなどのHDDプレイヤーで聴いている”などの各項目に対して、5段階評価(1:当てはまらない~5:当てはまる)で測定した。

CCCDに関する知識 参加者がCCCDや著作

権・違法コピーに関する事前知識をどの程度持っていたかを5段階(1:知らなかった~5:知っていた)で測定した。

CCCDに対する態度 CCCDに対してどのように思っているかを測定する尺度。“CCCDは著作権を守るために必要である”、“CCCDはCDの売り上げを守るために必要である”、“CCCDを出すレコード会社に好感が持てる”、“CCCDを買ってしまったら後悔すると思う”などの項目によって5段階評価(1:あてはまらない~5:あてはまる)で測定した。

CCCDに対する購買行動 標準的なCDの価格をシングル1枚1500円、アルバム1枚3000円とした上で、“CCCDの価格がどの程度なら購入したいと思いますか?”、“どれくらいの価格が適当だと思いますか?”という2つの質問を提示し、シングル・アルバムそれぞれに対して、金額を記入をさせた。

違法コピー行動 “Winnyなどのファイル共有ソフトを利用している”という項目に対して5段階評価(1:あてはまらない~5:あてはまる)で測定した。

情報提示

CCCDに関してポジティブなことを強調した情報(ポジティブ情報:Figure 1参照)、ネガティブなことを強調した情報(ネガティブ情報:Figure 2)、ニュートラルな情報(ニュートラル情報:Figure 3)の3種類を作成した。ポジティブ情報とネガティブ情報にはそれぞれCCCDに関するメリットあるいはデメリットが強調して提示されている。CCCDに関してはさまざまな議論がなされているが、

本研究では CCCD を導入するメリットを、1) ネット上などで行われている違法コピーを未然に防ぐことができる、2) 違法コピーを防ぐことにより著作権を守ることができる、3) 違法コピーを利用する第三者の不当な利益を排除することができる、とし、デメリットを、1) 違法であるなしに関わらずコピーができない、2) 再生に不都合が生じる可能性がある、3) 再生に不都合が生じてもその保障がなされていない、とした。つまりここでは CCCD を購入することは著作権を守りなんらかの形で社会に貢献するが、個人的の楽しみに関しては多少の不都合が生じるとした。ニュートラル情報にはメリットとデメリットの両方を提示したが、提示する順序による主効果を取り除くため、メリットが先に書かれているものとデメリットが先に書かれているものの2種類に分け、それらをあわせてニュートラル情報とした。ひとつの質問紙にはいずれかひとつのパターンの情報が提示されている。

実験手順

最初に、規範意識、音楽に対する態度、音楽を聴くメディア、CCCDに関する知識、CCCDに対する態度、CCCDに対する購買行動、違法コピー行動を測定する。次に、CCCDに関する情報を提示し、もう一度、CCCDに対する態度、CCCDに対する購買行動、違法コピー行動(情報提示後の違法コピー行動に関しては、“違法コピーすることはよくないことだ”という項目)を測定した。上記手続きによって、情報提示による CCCD に対する態度等の変化を

測定した。

3. 結果と考察

規範意識の因子構造

規範意識を測定した項目に対して因子分析をおこなった(最尤法,プロマックス回転)。その結果、因子1は“どんな理由であれ法を犯すことは許されない”、“少しくらいの違法行為は誰でもしていることなので構わない(反転項目)”などの項目に高い負荷量が見られたので“遵法”因子とした。因子2は“秘密は必ず守る”、“困っている人を助けるのは面倒である(反転項目)”などの項目に高い負荷量が見られるので“道徳”因子とした。因子3は“上下関係はいつも守らなければならない”、“自分の考えと合わなければ習慣などを無視しても良い(反転項目)”などの項目に高い負荷量が見られるので“マナー”因子とした。これらの結果より、規範意識に関して仮説通りの因子構造が得られたといえる(Table 1 参照)。

規範意識と情報提示

規範意識と情報提示が各個人の認識、態度、および購買行動に及ぼす影響を検討するために、規範意識の各因子の尺度得点(上記項目の合計点)により実験参加者を高群 - 低群(平均得点が4以上を高群,3以下を低群)に分類し、2(規範意識の各因子:高群,低

群) × 3 (情報提示: ポジティブ情報提示, ネガティブ情報提示, ニュートラル情報提示) × 2 (情報提示: 情報提示前, 情報提示後) の繰り返しのある分散分析をおこなった。

遵法因子に関しては, “ CCCD は著作権を守るために必要である ” という態度について遵法因子と情報提示の交互作用が有意に認められた ($F(2,124)=3.21, p<.05$)。これは遵法意識の高い人に CCCD に関するポジティブな情報を提示すると, 著作権保護の観点から CCCD の必要性を認識させることができることを意味している (Figure 4)。

道徳因子に関しては, “ CCCD を出すレコード会社に好感が持てる ” という態度について道徳因子と情報提示の交互作用が有意傾向だった ($F(2,124)=2.96, p<.10$)。これは道徳観の高い人に CCCD に関するポジティブな情報を提示すると, その CCCD を出すレコード会社に対して好感を抱かせることができることを示唆している (Figure 5)。

“ CCCD の価格がどの程度なら購入したいと思いますか ” という CCCD の購入行動に関しては, CCCD シングル購入について道徳と情報提示の交互作用が有意であった ($F(2,124)=3.26, p<.05$)。また CCCD のアルバムに関しては道徳と情報提示の交互作用が有意傾向だった ($F(2,124)=2.47, p<.10$)。これらのことは, CCCD に関するポジティブな情報を提示することにより, 道徳観の高い人には好感を抱かせることができるだけでなく, 実際の価格意識まで変化させることができることを意味するものと考えられる

(Figure 6)。

道徳因子が後悔という感情に及ぼす影響に関しては, “ CCCD を購入してしまったら後悔すると思う ” という感情について道徳因子と情報提示の交互作用が有意傾向であった ($F(2,124)=2.93, p<.10$)。これは, 道徳観の低い人に CCCD に関するポジティブでない情報を提示すると, 購入後に後悔をさせることになることを示唆している。

マナー因子に関しては, “ CCCD は CD の売り上げを守るために必要である ” という態度に対してマナーによる主効果が有意傾向であった ($F(1,124)=3.22, p<.10$)。これは, マナー意識の高い人ほど, CCCD の必要性を感じているということを示唆している (Figure 8)。

違法コピーをしている人に対する効果

実際に違法コピーをしている人に対する情報提示の効果を検討するため, “ Winny などのファイル共有ソフトを利用している ” という質問項目において被験者を高群 - 低群に分け, 2 (違法コピーをしている: 高群 - 低群) × 2 (情報提示: 前 - 後) の分散分析を行った。その結果, どの質問においても有意な主効果及び交互作用は認められなかった。これは実際に違法コピーをしている人には, CCCD に関する情報を提示しても違法コピーをやめさせることを期待することはできないということを示唆しているものと考えられる。

4. 総合考察

本研究より，単に CCCD に関する情報を提示するだけで，違法コピーや著作権に対する意識を高めることができるという結果が示された。

また，規範意識と情報提示に関して以下のことが示された。

- (a) 遵法意識の高い人に CCCD に関するポジティブな情報を提示すると，CCCD の必要性を認識させることができる。
- (b) 道徳観の高い人に CCCD に関するポジティブな情報を提示すると，CCCD を出すレコード会社に好感を抱かせることができ，かつ CCCD の価格意識まで変化させることができる。
- (c) 道徳観の低い人に CCCD に関するポジティブでない情報を提示すると，CCCD の購入に対して後悔をさせることになる。
- (d) CCCD 導入による CD の売り上げに関する情報は，ポジティブ・ネガティブに関係なくマナー意識の低い人には良い印象を与えない。

このように個人の規範意識や情報提示の仕方によって，各個人に与える CCCD あるいは違法コピー・著作権に対する意識に差が生じることが認められた。特に，個人の規範意識が密接に関わるということは，同じ情報を与えてもそこから受ける印象や認識には個人差があるということを示している。よって，単に CCCD に関するポジティブ情報を提示す

るばかりでなく，各個人に合った情報提示の仕方を検討することによって，より効果的に違法コピーや著作権に対する意識を高めることができる。

しかしながら，実際に違法コピーをしている人には情報提示による意識変化は認められなかった。以上より，CCCD に関する情報提示は違法コピーの予防としては有効だが，既に違法コピーをしている人にそれをやめさせることは不可能であるということが明らかになった。

今後の課題として実際に違法コピーをしている人にとって有効な方法や情報提示の仕方を検討する必要がある。例えば，単に CCCD と違法コピーとの関連性を提示するだけでなく，著作権侵害に課せられる罰則を明記するなど，実際に違法コピーをしている人にとって興味深いであろう情報を提示すれば，彼らの意識の改善に有効であるかもしれない。また，本研究では情報を提示した直後の意識変化を測定したが，情報提示後の時間の経過が意識変化に何らかの影響を及ぼすことも考えられる。よって情報提示後の意識変化を時系列的に調査する必要があるといえるだろう。

5. 参考文献

田中知恵 2004 関連感情がメッセージの精緻化に及ぼす影響：印刷媒体広告を用いた情報処理方略の検討，社会心理学研究，20(1)，1-16.

- 上市秀雄・楠見孝 1998a パーソナリティ・認知・状況要因がリスクテイキング行動に及ぼす効果, 心理学研究, 69(2), 81 - 88 .
- 上市秀雄・楠見孝 1998b 損失状況におけるリスク行動の個人差を規定する要因: 共分散構造分析法による検討, 日本リスク研究学会誌, 10(1), 65 - 72 .
- 上市秀雄・楠見孝 2000 後悔がリスク志向・回避行動における意思決定に及ぼす影響: 感情・パーソナリティ・認知要因のプロセスモデル, 認知科学, 7(2), 139-151 .
- 上市秀雄・楠見孝 2004 後悔の時間的变化と対処方法: 意思決定スタイルと行動選択との関連性, 心理学研究, 74(6), 487 - 495 .
- 上市秀雄・楠見孝 2006 環境ホルモンのリスク認知と回避行動, 認知科学, 13, 32-46 .

Table 1 規範意識の因子構造

項目	因子1	因子2	因子3
因子1: 遵法			
車や人通りが少なくても信号無視はしない	<u>0.431</u>	-0.078	-0.086
未成年の飲酒・喫煙は悪いことだと思う	<u>0.529</u>	-0.090	-0.226
電車のキセル乗車など大した問題ではない*	<u>0.340</u>	-0.005	0.041
法律で決められた罰則は厳密に行ったほうが良い	<u>0.516</u>	-0.145	0.037
どんな理由であれ法を犯すことは許されない	<u>0.652</u>	0.021	-0.025
法を犯したものは例え未成年でも厳しく罰するべきだ	<u>0.583</u>	0.009	0.061
少しくらいの違法行為はみんなしているから構わない*	<u>0.603</u>	-0.006	-0.011
因子2: 道徳			
秘密は必ず守る	-0.179	<u>0.904</u>	-0.177
借りたものは必ず返す	0.103	<u>0.663</u>	-0.104
困っている人を助けるのは面倒である*	-0.182	<u>0.449</u>	0.000
何事にも自己規制が必要である	0.283	<u>0.372</u>	0.151
世の中の秩序に従って生きたい	0.304	<u>0.223</u>	0.288
因子3: マナー			
電車やバスの中でも携帯電話で通話することはよくある*	0.032	0.023	<u>0.199</u>
マナーを守ることは大切である	0.121	0.352	<u>0.323</u>
上下関係はいつも守らなければならない	-0.121	0.179	<u>0.503</u>
敬語を使うのはわずらわしいので、できれば使いたくない*	-0.208	-0.056	<u>0.751</u>
自分の考えと合わなければ、習慣などを無視してもよい*	0.077	-0.291	<u>0.544</u>

(*は反転項目)

因子間相関

因子	1	2	3
1	1.000	.414	.360
2	.414	1.000	.561
3	.360	.561	1.000

CCCD(Copy Control CD / コピーコントロール CD)

CCCDとは、デジタルコピーを防ぐために作られたCDのことで、普通のCDと違い、パソコン等のハードディスクにデータ化することができないように細工がなされています。

CCCDを導入するメリットとして、次のようなことが挙げられます。

・違法コピーの防止

現在インターネット上では違法な音楽ファイルの交換・共有が増えていますが、その原因であるCDの違法コピーを、CCCDの導入によって未然に防ぐことができます。CDの違法コピーは著作権の侵害に当たり、CDの売り上げに大きな被害を与えています。

・著作権擁護

違法コピーを未然に防ぐことにより、アーティストや作詞作曲家の著作権を守ることができます。著作権を守ることは、音楽に関わる仕事をする人たちが利益を得るために必要不可欠なことです。

・第三者の不当利益排除

違法コピーを利用することにより、本来製作者や消費者に還元されるべき利益の一部を第三者が不当に得ていることがあります。CCCDの導入により、こうした第三者の不当利益を排除することができます。



これらは全て、新しいアーティストや楽曲の誕生を支え、健全な音楽文化の発展に寄与するものと考えられます。

ただし、次のようなことも考えられます。

- ・ CCCDはデジタルコピーができないので、CD-RやMP3ファイル等へのコピーはできません。ただし、MDへの録音は従来通り可能です。
- ・ CCCDは、一部の再生メディアでは音質が劣化したり、再生に不都合が生じる可能性があります。
- ・ 万が一CCCDが再生できなかった場合、レコード会社やAV機器メーカーはこれを保障しません。

Figure 1 CCCDに関するポジティブ情報

CCCD(Copy Control CD / コピーコントロール CD)

CCCDとは、デジタルコピーを防ぐために作られたCDのことで、普通のCDと違い、パソコン等のハードディスクにデータ化することができないように細工がなされています。

CCCDを導入するデメリットとして、次のようなことが挙げられます。

・コピーができない

CCCDはデジタルコピーができないので、目的の如何に関わらず、CD-RやMP3ファイル等へのコピーはできません。ただし、MDへの録音は従来通り可能です。

・再生に不都合が生じる可能性

以下のメディアでは再生ができなかったり、音質が著しく劣化する可能性があります。

- ・パソコン
- ・DVDプレーヤーの一部
- ・ポータブルCDプレーヤーの一部
- ・カーステレオの一部
- ・ハードディスクプレーヤーの一部
- ・ゲーム機の一部
- ・CD-R対応CDプレーヤーの一部
- ・MP3対応CDプレーヤーの一部

また、CCCDを再生するとプレーヤーに大きな負担をかけるので、CDと比較して音質が劣化したり、プレーヤーの寿命を縮める(最悪の場合故障)等の可能性があります。

・保障がされていない

上記のような問題があるにも関わらず、CCCDの製造元であるレコード会社や、それを再生するAV機器のメーカーでは、全てのプレーヤーでの再生を保障していません。よって、CCCDを再生できなかったり、CCCDを再生することによってプレーヤーに異常をきたしても、それを保障する人は誰もいません。



よって、CCCDを購入するのに使用するお金は全てムダになる可能性があります。
また、CCCDを再生したことが原因でプレーヤーに異常をきたしても、それは全てあなたの責任になります。

ただし、次のようなことも考えられます。

- ・ 違法な音楽ファイル交換・共有の原因であるCDの違法コピーを、CCCDの導入によって未然に防ぐことができます。
- ・ 違法コピーを未然に防ぐことにより、アーティストや作詞作曲家の著作権を守ることができます。
- ・ 違法コピーを利用する第三者の不当な利益を排除することができます。

Figure 2 CCCDに関するネガティブ情報

CCCD(Copy Control CD / コピーコントロール CD)

CCCDとは、デジタルコピーを防ぐために作られたCDのことで、普通のCDと違い、パソコン等のハードディスクにデータ化することができないように細工がなされています。

CCCDを導入するメリットとデメリットは以下の通りです。

メリット

・違法コピーの防止

現在インターネット上では違法な音楽ファイルの交換・共有が増えていますが、その原因であるCDの違法コピーを、CCCDの導入によって未然に防ぐことができます。

・著作権擁護

違法コピーを未然に防ぐことにより、アーティストや作詞作曲家の著作権を守ることができます。

・第三者の不当利益排除

違法コピーを利用することにより、本来製作者や消費者に還元されるべき利益の一部を第三者が不当に得ていることがあります。CCCDの導入により、こうした第三者の不当利益を排除することができます。

デメリット

・コピーができない

CCCDはデジタルコピーができないので、目的の如何に関わらず、CD-RやMP3ファイル等へのコピーはできません。ただし、MDへの録音は従来通り可能です。

・再生に不都合が生じる可能性

一部のメディアでは再生ができなかったり、音質が著しく劣化する可能性があります。また、CCCDを再生するとプレーヤーに大きな負担をかけるので、CDと比較して音質が劣化したり、プレーヤーの寿命を縮める(最悪の場合故障)等の可能性があります。

・保障がされていない

上記のような問題があるにも関わらず、CCCDの製造元であるレコード会社や、それを再生するAV機器のメーカーでは、全てのプレーヤーでの再生を保障していません。

Figure 3 CCCDに関するニュートラル情報

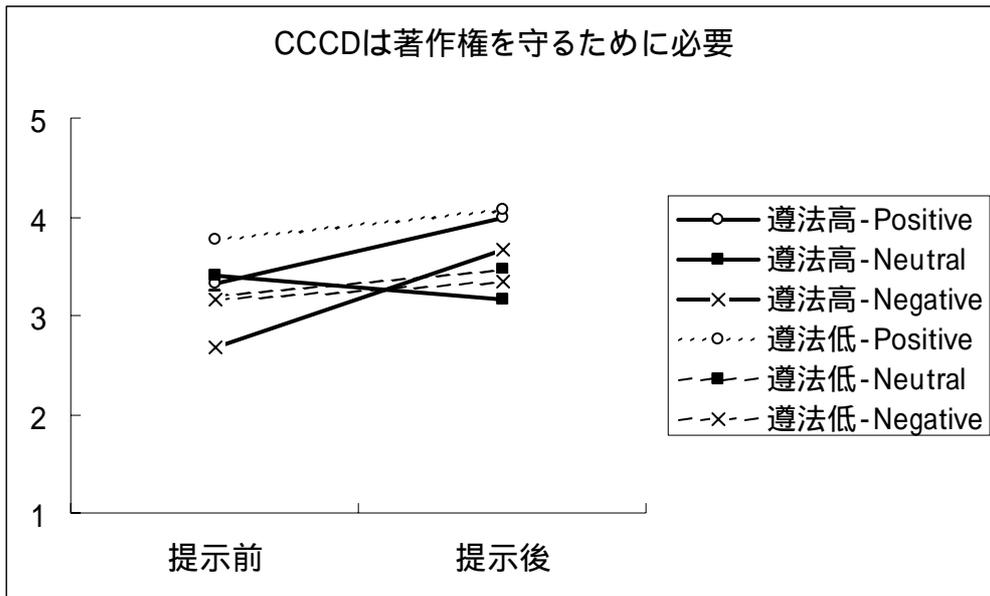


Figure 4 遵法因子, 情報提示による CCCD に対する態度の変化

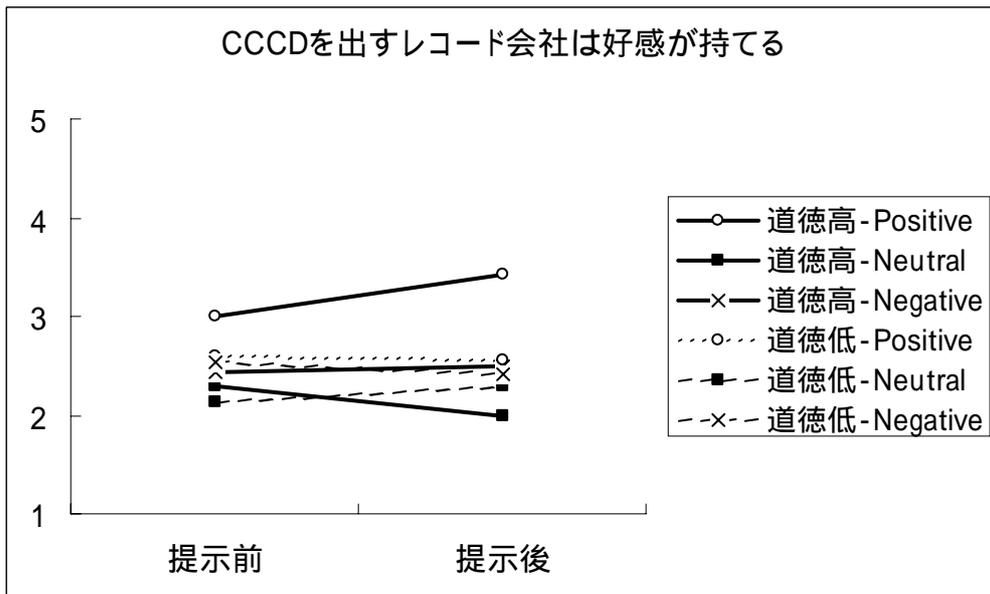


Figure 5 道德因子, 情報提示による CCCD に対する態度の変化

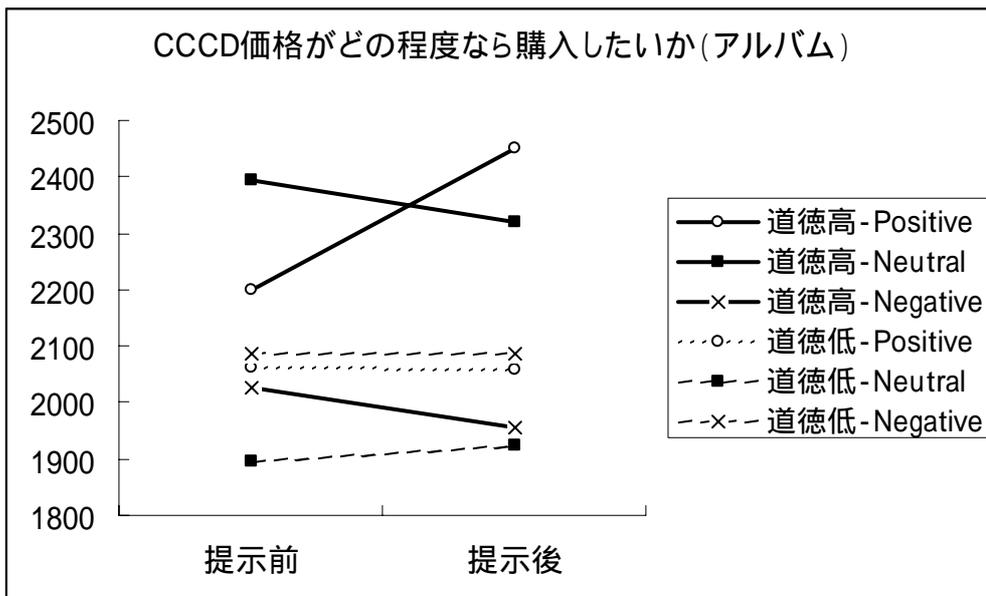
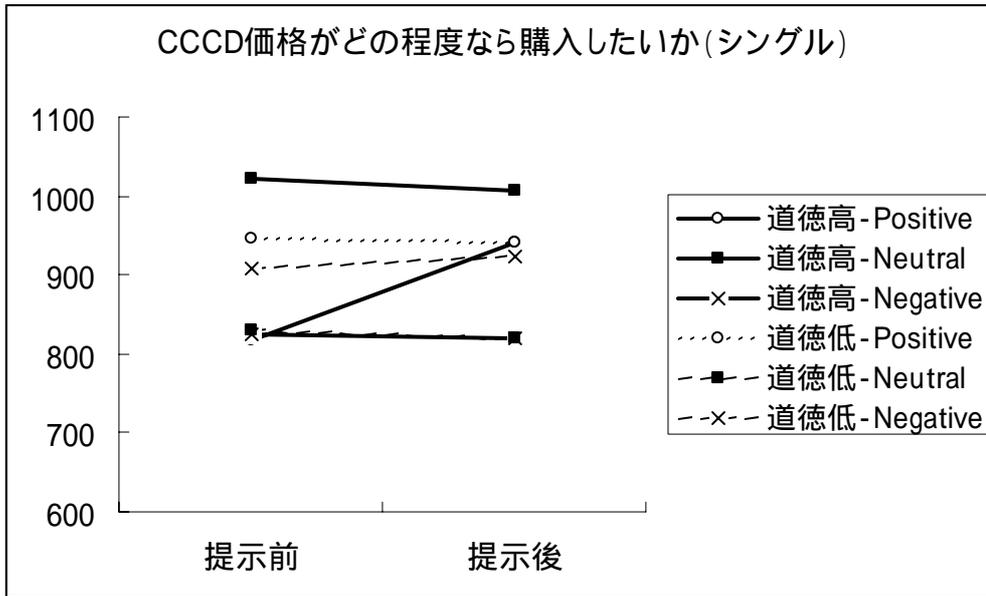


Figure 6 道德因子，情報提示によるCCCDに対する購買行動の変化

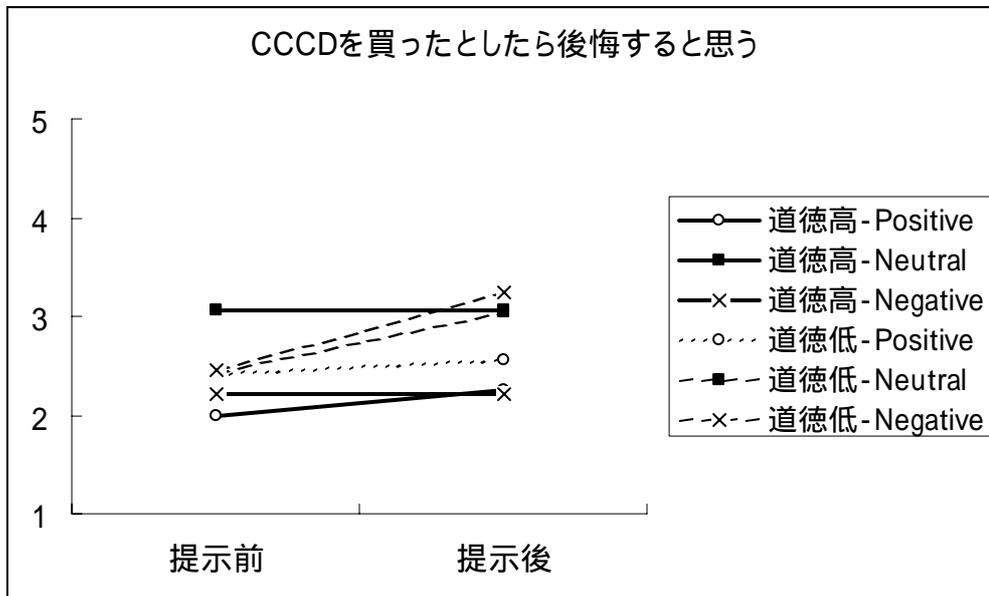


Figure 7 道德因子，情報提示による CCCD に対する態度の変化

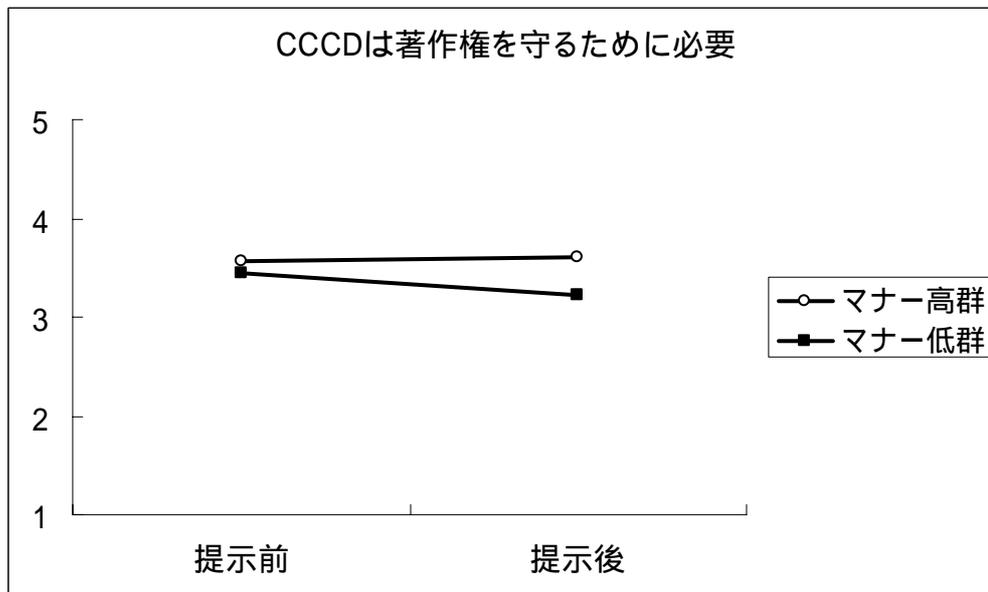


Figure 8 マナー因子，情報提示による CCCD に対する態度の変化

5 主な学会発表論文

- 5.1 生活リスク認知と対処行動ニート, 多重債務, 生活習慣病に関する
大学生の意識調査..... 7 7
- 5.2 犯罪不安がリスク認知, 対処行動, 司法行政評価に及ぼす影響:
女子大学生の意識調査..... 7 8

生活リスク認知と対処行動

- ニート、多重債務、生活習慣病に関する大学生の意識調査 -

上市 秀雄 楠見 孝

(筑波大学大学院システム情報工学研究科, 京都大学大学院教育学研究科)

key words: リスク認知, 意思決定, 個人差

目的 本研究の目的は、日常生活において遭遇する様々な生活リスクに関して、これらリスクに対する認知と対処行動を統一的に説明するためのモデルを提案することである。上市(2003), 上市・楠見(1998a, 1998b, 2000, 2006)は、身体的リスク(病気, 事故など), 金銭的リスク(投資, 盗難など), 人生に関するリスク(失業, 解雇など)に関する意思決定プロセスを実験および調査によって検討した。その結果, 知識・能力 リスク認知 行動, 回避意識 コスト認知 行動, という2つのプロセスの存在, および後悔が次の意思決定に影響することを示した。自分の行動に対する後悔に関しては、意思決定スタイルを取り上げ、分析型の方が直観型と比較して後悔が小さいことを示した(上市・楠見, 2004)。

現在、生活リスクに関して社会問題化したリスクも存在する。ニート(Not in Employment, Education or Training: 職についておらず, 学校機関にも所属しておらず, 就労に向けての具体的な働きをしていない労働可能な15-34歳までの家事手伝いを含む若者)は約52万人存在する(2004年版労働経済白書, 厚生労働省)。多重債務による自己破産申立件数は20万件を超え, 10年前の5倍になっている(平成16年度司法統計年報, 最高裁判所)。健康に関することでは、生活習慣病(インスリン非依存性糖尿病, 肥満, 高脂血症, 高血圧症等)のうち糖尿病に関しては、糖尿病の可能性を否定できない人は約880万人で, 5年間で約200万人増加したと推計されている(平成14年糖尿病実態調査報告, 厚生労働省)。

そこで本研究では、社会問題化した生活リスク状況の代表例としてニート(人生に関する状況), 多重債務(金銭的状況), 生活習慣病(身体的状況)を取り上げる。そして上市(2003), 上市・楠見(1998a, 1998b, 2000)の結果を、これら社会問題化した生活リスクに適用することにより、不適切な行動にいたるプロセスだけでなく、日常的におこなっている不適切な行動を改善させるための何らかの方法を提案することが可能になると考える。

方法 調査対象者 大学生190名(男性117名, 女性71名, 不明2名)。質問冊子を2005年12月に配布回収した。

質問項目 5段階評価法(1:あてはまらない~5:あてはまる) (a)認知要因 ()情報接触 “ニート(多重債務, 生活習慣病)に関する記事を読んでいる”, ()ベネフィット認知 “ニートは自分らしい生活ができる”, “キャッシングは便利だ”, “規則正しい生活をするとは健康維持ができる”, ()コスト認知 “就職することは困難だ”, “欲しい物をお金がたまるまで我慢することは困難だ”, “規則正しい生活をするのは困難だ”, ()リスク認知 “ニートでいると社会的信用が下がる”, “キャッシングすると社会的信用が下がる”, “不規則な生活をするとは生活習慣病になる”, ()リスクコントロールピリティ “ニートになるのは本人に責任がある”, “節度を持ってカードを利用すればお金を返さなくなることはない”, “自分が気をつけることで生活習慣病は避けることができる”, ()モラル・意識 “就職は絶対にしなければならないことだ”, “借金があったとしても何とかかなる*(*)は反転項目”, “規則正しい生活をするとは健康維持に必要なだ”, ()対策 “政府が雇用対策をするべきだ”, “利息の上限を制限すべきだ”, “政府が食生活や健康維持の方法を教えるべきだ”, ()社会生活破綻の原因 “ニ

ートは日本経済に悪影響を及ぼす”, “カードの利用は家庭生活破綻の原因となる”, “生活習慣病が増えると医療費が上がって家庭生活に影響する”, ()後悔予期 “卒業後就職しなかったため通常の社会的生活が営めなくなったとしたら後悔する”, “カードローンで多重債務になったとしたら後悔する”, “食生活を改善しなかったため生活習慣病になったとしたら後悔する” (b)態度 ()行動促進 “良好な人間関係を築くのが苦手だ”, “ローンにすれば買えると思ってしまう”, “運動は苦手だ”, ()行動抑制 “他人よりもよい生活をしたい”, “借金は一度に返したい”, “食生活を改善しなければと思う” (c)リスク回避行動 “わずらわしい対人関係を選んでいる*”, “やりたいことが見つからない限り就職はしない*”, “親や知人にお金を借りて生活に必要なものを買った*”, “手元にお金はなくても欲しいものがあつたときにはカードローンを利用する*”, “規則正しい生活をしている”, “健康診断で以上がない限りは特に食生活に気をつけない*” (d)行動選択 ビニエツト法を用いて架空の状況を設定し, 二者択一法によって逸脱行動に至る可能性のある日常的な不適切行動を測定した。“就職活動の時期になりました。しかしやりたいことも自分の適性もよくわかりません。どうしますか? 就職する(適切行動), 就職しない(不適切行動)”, “どうしても欲しいものがあります。もう二度と手に入らないかもしれません。しかし口座には十分なお金がありません。クレジットカードで購入しますか?”, “今のままでは生活習慣病になるといわれました。しかし自覚症状は全くありません。今すぐ生活習慣を変えますか?” (e)生活リスク予測確率 将来自分自身が、ニート, 多重債務, 生活習慣病になる確率を0~100%で測定。

結果と考察 行動選択の人数をTable 1に示す。8-19%程度の人は、将来の生活リスクを高めるような不適切行動をしていた。また適切-不適切行動者間の認識の差異を検討するためにt検定をおこなった。その結果、状況に共通して有意差が認められた要因は、コスト認知, リスク認知, リスク回避行動であった。また生活リスク予測確率(%)に関しては、ニート($t(163)=-3.329, p<.001$; 就職する $M=12.59 (SD=18.943) <$ 就職しない $M=31.07 (SD=28.701)$), 多重債務($t(179)=2.117, p<.036$; キャッシングしない $M=11.51 (SD=16.470) <$ キャッシングする $M=18.56 (SD=19.767)$)に有意差があった。つまり不適切な行動をする人は、生活リスクを避けるためのコストを払いたくないと感じ、不適切な行動による生活リスクを過小評価し、不適切な行動をする傾向が高かった。しかし同時に自分自身の将来の生活リスクに関しては、高く認知していることもわかった。この相反する結果は、日常的な意思決定プロセスと将来に対する長期的な意思決定プロセスが異なることを示唆している。

Table 1 生活リスクに関する行動選択の人数(%)

リスク行動の状況	適切行動	不適切行動
ニート(就職活動)	175 (92.1)	15 (7.9)
多重債務(キャッシング)	154 (81.1)	36 (18.9)
生活習慣病	161 (84.7)	29 (15.3)

本研究は、平成17年度科学研究費補助金(課題番号:15530398)研究基盤(C)(2)による助成を受けた。

(UEICHI Hideo, KUSUMI Takashi)

犯罪不安がリスク認知, 対処行動, 司法行政評価に及ぼす影響

- 女子大学生の意識調査 -

上市 秀雄 楠見 孝

(筑波大学大学院システム情報工学研究科, 京都大学大学院教育学研究科)

key words : リスク認知, 犯罪不安, 個人差

目的

犯罪不安とは、犯罪への不安・怖れや犯罪と関係する事柄に対する感情的な反応である(Ferraro & LaGrange, 1987)。犯罪不安は、物理的環境(見通しがよい等)や犯罪認知件数, 検挙率などの客観的情報(e.g., 小野寺・桐生・樋村・三本・渡邊, 2002)だけでなく, 情報源(e.g., Weitzer & Kubrin, 2004)とも関係する。盗難防止行動に関しては, パーソナリティ 認知要因 リスク回避行動というプロセスが示されている(上市, 2003)。犯罪被害に関しては, Herman(1992)が犯罪被害者の精神的回復過程を検討し, 新(2000)や大和田(2003)などは犯罪被害者のケアと支援方法について検討している。しかし従来の犯罪不安研究は個別的であるため, 内的要因(犯罪不安やリスク認知など)と外的要因(情報, 地域社会コミュニティ, 被害者救済システム, 警察・裁判所等の公共機関などに対する評価), 犯罪対処行動などの全体の関連性が不明である。よって本研究では, 犯罪不安, 認知要因, 犯罪対処, 司法・行政・社会評価, 要望等の要因間の全体の関連性を明らかにする。

方法

調査対象者 首都圏の女子大学生 53 名。質問冊子を 2006 年 10 月に配布回収した。

質問項目 情報量 犯罪および防犯に関する情報をどこから得ているかを“TV番組”, “新聞”, “雑誌”, “インターネット”各について7段階(1:全く得ていない~7:非常に得ている)で測定。**犯罪不安** ()直接の被害者になる不安“泥棒に入られる”, “性犯罪の被害にあう”など 14 項目, ()加害者に対する不安“犯罪者が自宅周辺に戻ってくる”, “逆恨みされるかもしれない”など 8 項目, ()一般的不安“未成年者の犯罪が増えている”など 4 項目に対して 7 段階評定法(1:全く不安ではない~7:非常に不安である)させた。**認知要因** ()リスク認知“泥棒にあうこと”, “性犯罪の被害にあうこと”など 13 項目に対して, 7 段階評定法(1:全く可能性はない~7:非常に可能性が高い)させた, ()コスト認知“防犯のためなら多少不便でもよい”など 3 項目。**犯罪対処**“被害にあったらすぐ警察に届ける”, “自分たちで解決できる(反転)”の 2 項目。**司法・行政・社会評価** ()裁判所“一般市民の意識とずれがある”など 3 項目, ()警察“十分対応してくれない”など 3 項目, ()被害者救済“被害者サポート施設がない”など 2 項目。**要望** ()裁判所“被害者が意見を言う機会必要”など 3 項目, ()警察“警官を増やす”など 3 項目, ()被害者“加害者に謝罪してほしい”など 2 項目, ()厳罰化“凶悪犯罪を厳罰化してほしい”など 3 項目を 7 段階で測定した。これらの下位項目の合計得点を用いてパス解析をおこなった。**犯罪被害** 犯罪被害届出の回数, 被害当時の気持ちや警察の対応, 犯人を許せたか, などについて自由記述で測定した。

結果と考察

犯罪不安と関連する要因の構造 パス解析の結果, 防犯に関する情報量が犯罪不安全体に影響を及ぼしていることが明らかとなった(Figure 1)。個人の犯罪被害に関する意思決定プロセスに関しては, 犯罪者に対する不安感が高い人ほど, 日常の防犯するためのコストをいとわないため, 何か被害に

あつたらすぐに警察に行くという考えを持っていることが示された。また犯罪者に対する不安感の高い人は, 犯罪被害者ケアのための施設に対して十分でないと評価している傾向が高く, そのため被害者を救済するような要望を持っていることが明らかとなった。犯罪増加などの一般的な犯罪不安の高い人は, 裁判や警察に対して十分機能していないという評価を持っている傾向が高く, そのため裁判や警察に対して, “被害者が裁判で意見を言う機会が必要だ”, “警察官を増員してほしい”などの要望を持っていることが明らかとなった。厳罰化に関しては, 被害者のケアが十分でないことや裁判で被害者の権利が守られていないなどの考えを持つ人ほど, 厳罰化を望む傾向が高いことがわかった。

犯罪被害 犯罪被害を警察に届け出た人は 53 名中 12 名(内訳:痴漢 6, ストーカー 1, 盗難 4, 強盗 1)であった。警察に対する満足部分はパトロール強化 3, 丁寧な対応 2, 特になし 6, 不明 1, 不満な部分は, 対応が悪い 3, 犯人が捕まったかどうか教えてくれない 2, パトロールしてくれない 2, 特になし 2, 不明 3 だった。犯人に対する感情については, 怒り 8, 憎しみ 1, 恐怖 1, 不明 3 だった。また犯人を許せた人は 4(理由:どうでもいいと思った 2), 許せなかった人は 6(理由:犯罪は許せない 5), 不明 2 だった。犯人を許すことができるために必要なこととして, 謝罪(2), 反省・更正(3)を望んでいることもわかった。今後男女別, 年代別, 犯罪被害の有無別に要因間の関連性などについて検討する必要がある。

参考文献

- 新恵理 2000 犯罪被害者支援 径書房
 Ferraro, K., & LaGrange, R. 1987 The measurement of fear of crime, *Sociological Inquiry*, 57, 70-101.
 Herman, J. L. 1992 *Trauma and recovery*, New York: Basic Books.
 小野寺・桐生・樋村・三本・渡邊 2002 犯罪不安喚起の諸要因を検討する実験室研究のアプローチ 犯罪心理学研究, 40, 1-12.
 大和田 2003 犯罪被害者遺族の心理と支援に関する研究 風間書房
 上市秀雄 2003 個人的リスク志向・回避行動の個人差を規定する要因の分析 風間書房
 Weitzer, R., & Kubrin, C. E. 2004 Breaking News: how local TV news and real-world conditions affect fear of crime, *Justice Quarterly*, 21, 497-521.

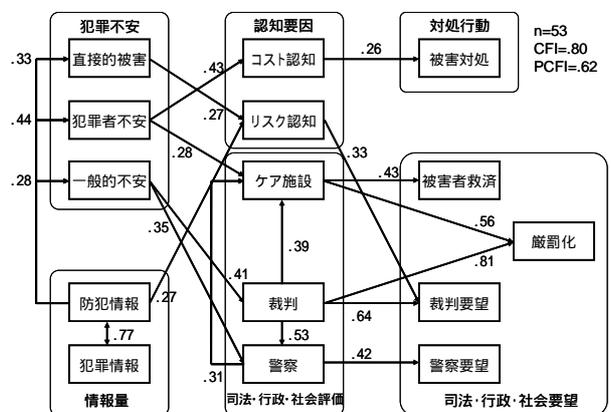


Figure 1 犯罪不安に関する要因間の関連性

本研究は, 平成 18 年度科学研究費補助金(課題番号: 15530398)研究基盤(C)(2)による助成を受けた。(UEICHI Hideo, KUSUMI Takashi)